

342

41r



始

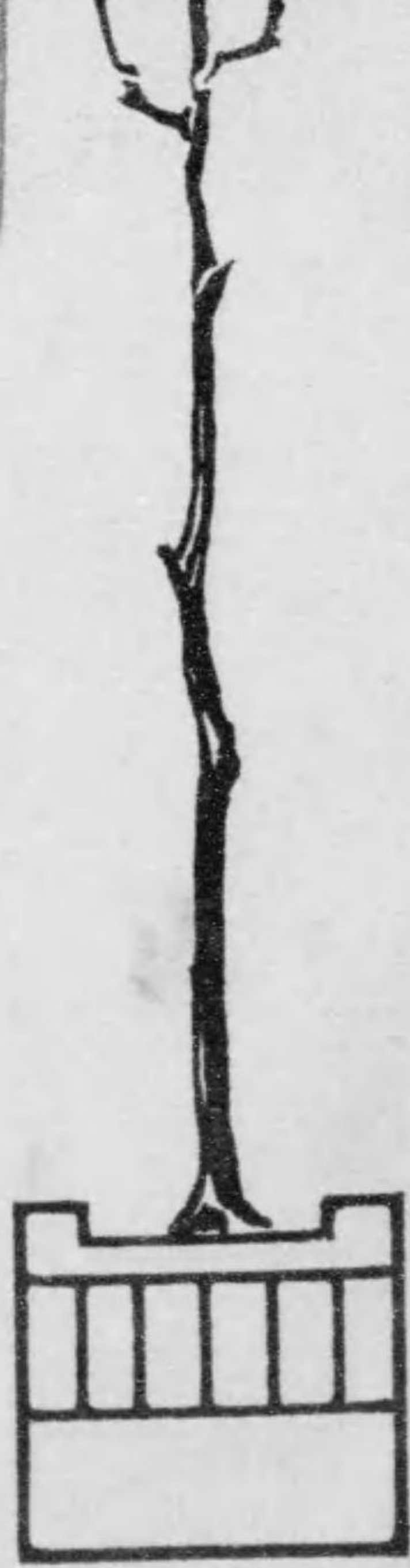


工3N57

342-41_イ



田中王堂著 書齋より街頭に



大正
2. 3. 12
購求

謹みて
家殿の膝下に呈す

〆
〆

解題

此書はこの兩三年に互つて僕がものした評論の選集であるが今之れに「書齋より街頭に」の標題を冠させたのには多少の意味が寓せられて居ないでもない。

僕は才、學ともになほ極めて未熟の者ではあるが、たゞ僕には宿昔志を立て、このかた夢寐の間にも忘るゝことの出来ない覺悟が一つある。其れは他でもない。(若しも僕の凡庸なる天分にして能ふことならば、學徒の識見と、志士の意氣とを併せ有し、志士の經綸を以て學徒の研鑽を積み、學徒の襟期を以て志士の利功を建てたいといふことである。是れまで僕は之れを一生の理想として來た。是れより先きも僕は之れを一生の事業として行くであらう。

如何にして僕は斯かる覺悟を抱くに到つたかといふと、僕の如き哲學と政治とに等分の興味を有する性格を以て、現代の如き理論と實行とが次第に近融する時勢に處するには、一切の感想と思索と、爲動とに於て、學徒たり、志士たるの資格を併せ有することが、自己を開發し、公共に貢獻する上に取つて最優の方針と信じたからである。

斯くして僕は學徒として理論に興味を有し、志士として實行に興味を有するものであるが、然し理論に興味を有するは専ら實行上の問題を解決せむがためであつて、實行に興味を有するは主に理論上の假設を吟味せむがために他ならない。

實行上の問題を講究するに至適の場所は靜肅なる書齋であつて、理論上の假設を吟味する唯一の標準は街頭の生活である。して見ると僕は賦性によつて、修養によつて、必然に書齋と街頭とを家としなければならぬ。兩棲

動物となつて居るのである。

兩棲動物は、其れが時としては陸に棲むこともあるし、また時としては水に棲むこともあるが、孰れにしても、絶えず兩棲の機能を存することを其れの特徴とする。されば僕にして眞に等しく書齋を家とし、街頭を家とする兩棲動物であるならば、書齋に居つて街頭を遣れず、街頭に出で、書齋を棄てず、志士の意氣を以て學徒の研鑽を積み、學徒の襟期を以て志士の利功を建てるものでなければならぬ。

評論は理論と實行との統一であり、學術と利功との融會である。つまり評論は理論の形式によつて實行の志向を満たすものであるともいへるし、また學術の方法を以て利功の建立を計るものであるともいへる。されば何人でも一身にして學徒たると、志士たるとの資格を併せ有すと信ずるものは、勉めて評論に由りて己れの力量の活動を企つべく、また世人は評論に

據りて審かに彼れの素性の品質を判すべきである。

茲に僕は評論十三篇を取つて之れを書齋より街頭に出さうとする。

『カントは燈火を以て書齋を照らし、ルウソオは炬火を以て街頭を耀かした』と云はれて居る。然し是れは識見萬古を開拓した學徒たるカントと、意氣一世を壓倒した志士たるルウソオとに就て始めて云はるべきことである。書齋と街頭と兩つながら多くの暗隅と黒點とを存する我が社會に在つて、是等の評論が一つの光たらむことは固より僕の冀ふところではあるが、實際、是等の評論がどれだけ燈火として書齋を照らし得、またどれだけ炬火として街頭を耀かし得るかに到つては、その實質と、實價と、實効とで證明せらるゝ曉を待つのは他はない。

明治四十四年三月念八日

駐春書院に於て

著

者識す

目次

- 一、近世文壇に於ける評論の價值……………一
- 二、公準……………一五
- 三、哲學の將來……………二五
- 四、ニイチエのザラツストラを論ず……………三七
- 五、文明史上に於けるロオマンチズムの意義……………七一
- 六、東西文明の融合の意義及び經過を論ず……………一一五
- 七、自由思想家の倫理觀……………一四九
- い自由思想とは何ぞや……………一四九
- ろ道德の本質……………一五六
- は從來の倫理思想の缺陷……………一六五

に反自己實現説に對する批判	一七〇
は抽象理想主義に對する批判	一七九
へ神秘主義に對する批判	一八八
と回顧主義に對する批判	二〇一
ち悲觀主義に對する批判	二〇七
り老婆政策に對する批判	二一一
ぬ倫理思想革新の方案	二二〇
八道德經驗に於ける情的評價の作用及び制限	二三五
九夏目漱石氏の『文藝の哲學的基礎』を評す	二五七
上編	二五七
い大なる創作者は同時に大なる批評家ならざるべからず	二五七
る心理的修養と論理的修養、發展的思索と作用的思索	二六四

は夏目氏の立論の輪廓	二六九
に根本事實とは何ぞや	二七四
は放射作用と分化作用	二九一
へ知情及び意	二九四
と科學と實行と、藝術とは生活の三段階を代表す	二九七
ち客觀的認識と主觀的鑑賞とは一切の經驗の必然に具備する	二九七
二側面なり	三二四
下編	三二八
り抽象と具體との意義を闡明す	三二八
ぬ如何なるものが文藝の對象たり得るか	三四九
る文藝上の理想は唯一あるのみ	三五七
を文藝に於ける眞の意義	三九四

目次

✓わ技巧の價值及び性質…………… 四〇七
か文藝の還元的感化に關する夏目氏の迷信…………… 四〇九
十、生活の價值、生活の意義…………… 四二五
十一、セオドル、ルウスヴェルト氏の道德觀及び政治觀を論ず…………… 四五五
十二、青年諸子の爲めに理想の意義を講ず…………… 四九五
十三、矛盾せる教育思想…………… 五二三

近世文壇に於ける評論の價值

西洋の文藝が我が國に輸入されて以來我が文藝が其の面目を一新したことは今茲に改めて云ふまでも無いことである。勿論我が國の文藝を取つて之れを西洋の文藝に比較する時は、我が文藝の彼の文藝に遠く及ばない所のあるは、我々自身と雖も認めなければならぬが、併し比較的短い歳月に於て、我が國の文藝が爲した進歩は、實に驚嘆に値すべきものがあると云つても宜い。斯くの如くにして西洋に存在する文藝は、悉く我が國に移植せられ、相應に發展を爲しつゝあるのであるが、獨り文藝の一種なる——殊に近世に於ては、小説と合せて文藝の二大様式の一と見らるべき——評

近世文壇に於ける評論の價值

論の進歩が極めて遅々たるのは、一寸考へると甚だ不思議に思はれるのである。成る程、評論と云ふ名稱の下に發表され、通用されて居る文章の数は決して少くは無いやうであるが、併しながら自分の見る所では、是等の多くは、其の實質と効用とに於て、評論といふ威嚴ある名稱を受くべき資格の無いものである。是等の文章の多くは、其の様式に於ては宣言であり、又其の精神に於ては獨斷であるから、其の様式に於ては討議であり、其の精神に於ては研究であるべき評論とは相去ること極めて遠いのである。故に、我が文壇は、或は既に小説の時代に到着したといふことは云へるかも知れないが、斷じて未だ評論の時代に到着したといふことは云へない。

併しながら、何故に西洋の文藝に於ては、評論が斯くの如く其の盛を極めて居るのに、我が國の文藝に於ては、評論が盛んにならないか、といふことを説明するのは、さほど困難の事では無い。之れを大観するに、所詮西洋と日

本との社會組織の相違から來たつて居るのである。

嚴密に觀察すると、西洋の社會組織と、日本の社會組織との間に存する相違は、随分古い時代から存して居るのであるが、併し、西洋でも、評論を産出し、又評論に依つて支持されることを必要とする社會組織は、先づ十五世紀、即ち、文藝復興期以後の事であると見ても差支は無い。勿論其の以前にも、希臘の社會組織の如く、自由研究と、自由討議との精神が、非常に發達したのも無かつた譯ではないが、未だ、近世的の意味に於ての評論なるものは發生しなかつたのである。

如何なる社會でも、全く保守的要素のみから成立しないと同時に、又全く進歩的要素のみからも成立するものではないが、併し其の重なる傾向から、凡ての社會を、保守的のもの、進歩的のものといふやうに、二つに分類することは出來ると思ふ。是等二種の社會を支持して居る思想の形式から觀て、

保守的のものを演繹的と云ひ、進歩的のものを歸納的と云ふならば、評論を必要とする社會は演繹的のものではなくて、是非とも歸納的のものでなければならぬのである。然るに、西洋と雖も、嚴密な意味に於て、歸納的と云はれ得るのは十五世紀以後のことである。

今茲で、演繹を主とする社會組織の特徴と、歸納を主とする社會組織の特徴とを説明する暇は無いが、一と口に云はゞ、演繹を主とする社會は、成るたけ過去に作つた生活の方針に依つて、新に起る慾望を支配して行かうとするに反し、歸納を主とする社會は、新しい慾望に従つて、其れに適當する生活の方針を創設しようとして居るのである。故に、演繹的の社會に於ては、慾望を統一するには、たゞ其れをして過去に出來た行爲の方針に服従せしむれば、其れで事は足りるのであるが、併し歸納的の社會に於ては、新しい慾望の起るに隨つて、成るたけ無理を爲さないで、其れに満足を與ふるやうな行爲

の方針を案出しなければならぬのである。希臘に起つた劇詩或は哲學は演繹的生活方法の最も好い標本であつて、近世に興つた小説或は科學は歸納的生活方法の最も好い標本である。

茲で、自分が評論と云つて居るのは、勿論英語の Essay 又は Criticism の事である。元來 *Criticism* と云ふ言葉は試験といふ事を意味するのであつて、冶金學に於て貴金屬を普通金屬と區別する時に用ゐる *Assay* と同じ言葉である。又 Criticism は希臘語の *kritikos* 即ち審判するといふことを意味する言葉から出て來て居るのである。何故に進歩的社會に於ては、優劣を試験し、或は眞偽を審判することが、保守的社會に於けるよりも一層必要であるかと、問ふならば、其れは云ふまでも無く、時々刻々に慾望の要求に隨つて、新しい行爲の方針を創設する必要に迫られて、二つ以上の方針が発見せらるゝ時に、比較的、多く慾望を満足せしむるものを選択することが必要であるからであ

る。進歩的社會に於ては、絶えず新しく生活の方針を創設し、絶えず時所の相違に随つて、其の中から最も適當と見ゆる所のものを選択しつゝあるのである。斯くの如くにして、其の役目を充たす評論、即ち Essay、又は Criticism が文藝の一種として重要な役目を充たして居るのである。

翻つて我が國の社會組織を考へて見るに、我が國は過去に於て、外國の文明の輸入と、自家の努力とに依つて、大なる進歩と發展とを實にしたことは争はれない事實ではあるが、併し、嚴密なる意味に於て、歸納的であつた時代は殆ど無かつたので、萬事は多く習慣と命令と、獨斷との形式に依つて決せられたのである。斯かる歴史によつて養成された我が社會に於て、新しい生活の方針を創設し、選擇することを唯一の職分とする評論を發生せしむることが出来なかつたのは、少しも怪しむに足らない。所詮我が國に於ては、評論に依つて支持され、發展さるゝことを必要とする社會組織が無かつ

たのである。

勿論、西洋の文明が輸入されて以來、我が國も、科學に於て、政治に於て、將た道德に於て、其の外形だけは確かに歸納的となつては居るが、併しながら、因襲の久しき、其の精神に於ては、未だ、演繹的であると云はなければならぬ。四圍の事情は既に吾人に歸納的たるを追つて居るのであるが、習慣の惰力は吾人を縛して、なほ演繹的たるに止まらしめやうとして居るのが、我が國今日の状態である。併しながら種々の事情が、歸納的となるに依つて、一層善い生活が出来ることを暗示して居る以上は、吾人は勉めて歸納的たる方向に進まなければならぬのである。西洋に於ては、十七八世紀以後新たに風雲を捲起して、一新時代を劃した英雄豪傑は、其の専門の種類何たるを問はず、皆な廣い意味での評論家であり、彼等の事業は悉く、評論であつたのである。であるから、近世期に於て、最も偉大であつた評論家の名

を挙げようとするれば、吾人は政治史、哲學史、文學史及び藝術史上最も偉大な事業を爲した人々の名を挙げれば足りるのである。此の意味に於て、ヴォルテール、デドロオ、カアライル、ラスキン、マシユウア、ノルド、ウヲタア、ペエタア等が評論家であつたことは無論のこと、又ヒユウム、ライブニツツ、カント、ヘエゲル等が評論家であつたことは無論のこと、ゲエテ、シラア、ウオゾオース、バイロン等も亦評論家であつたといひ得るし、チルゴオ、モンテスキウ、ルウソオ、アダム・スミス、エドマンド・バアク、マジニイ等も評論家であつたと云ひ得るのである。而して、是等の人々が、近世歐羅巴を構造する上に於て、如何なる貢獻を爲したかを知悉する者は、近世社會に於ける評論の價値を容易に體認するであらう。

評論の特徴とするものが二つある。其の一つは如何なる問題を取扱つても、其の態度が絶えず研究的なる所にある。評論は過去の經驗と、新しい境遇とを調整し、融合して、其所に新しい生活に適する新しい方針を發見することを目的として居るが、決して其の發見されたものを、最後のものとは考へては居らない。目前の困難を解決し、目前の活動を統一することを其の任務として居つて、其の場面の變はるに隨つて、既成の方針には執着しない。其の場面に最も適當した方針を案出しようと勉めて居る。も一つの特徴は、其の改造の部分的なる所にあるのである。評論は決して如何なる場合と雖も、過去の歴史に依つて作られた一切の經驗を棄て、全く新たに人生觀や宇宙觀を案出しようと企つるものではない。人間の性情にして一變せざる限りは、過去の經驗が發見し、或は創設した宇宙觀及び人生觀以外に、人間として新たに人生觀や宇宙觀を作ることの不可能なるを知つて居る。併し又、人間の慾望や理想が部分的に變化するに隨つて、過去に作られた人生觀や宇宙觀も亦時々、部分的の改造を要することをも知つて居る

から、評論は常に人生の部分的改造を目的として、部分的批評を試みるのである。故に評論の取る様式は常に系統でなくて、批判である。評論の取る精神は常に革命でなくて、改良である。

自分は嘗て小説と評論とが現代に於ける文藝の二大様式であると云つたことがある。何ちらも文明批評であるといひ得る。此の兩者は外形に於ては著しく相違して居るやうであるけれども、其の精神に於ては極めて類似して居るものである。今其の類似點を云へば、何ちらも等しく現在に活ける人間の如何なるものであるかといふことを知るのを唯一の目的として居る。故に、事實を正確に観察するといふことは何ちらに取つても一つの必要條件である。又、一つの必要條件は、其の事實が彼れに訴へる意味に随つて、彼れの立場から其の事實を産出した人生を最も忠實に暗示し、又は描寫すると云ふことである。併しながら、評論と小説との間には又相

違の點が無いでもない。兩者とも、其れが到達する最後の目的は、假令同一であつても、其れが執る觀察點と、其れが用ゐる方法との異なるに随つて、其の體系も自然に異なつて来る。多くの場合に於て、小説は興味を個體の事實に置き、評論は興味を一般の傾向に置くのである。小説も、評論も、共に等しく具體的の人間を理解することを目的とするものであるから、社會を知らんが爲めに、個人を借りることもあるし、又個人を知らんが爲めに、社會を借りることもあるが、何れかと云へば、小説は個人を描寫して社會を暗示しようとし、評論は社會を論議して個人を理解しようとするのである。

我が國に於て今日評論と云へば、或る作物の價値を批判する事ばかりに解せられて居るが、併し自分が茲で云ふ評論は人生其のもの、批判である。即ち作物に現はれた人生に就いては無くして、實際に存する人生に就いての批判である。社會其のものに就いての評論が發展した以上は、其れに

依つて作物に現はれる人間に就いて彼此批判することも出来ようが、生ける社會其のものゝ評論が存在しないところに、何うして、創作に現れる人間に就いての批判が出来ようか。活ける人生其のものに就いての評論があれば、其の標準に依つて、作物中の人生を批判することに意味はあらうが、其れが無い以上は、如何に作物中の人生に就いての批判は盛んであつても、多くは皆な評者自身の我儘勝手な見解に過ぎないではないか。

自分は決して小説の隆盛を非難する者ではない。併し自分は評論が小説以外に其の領分を占め、小説の用ゐない方法に依つて、小説の達せざる目的を達して居ることを斷言するに少しも躊躇しないのである。

評論の存在は、凡べての社會活動を批判的たらしむるの効果がある。不幸にして我が國には未だ真正な評論が起らない爲めに、大抵のものが獨斷的の性質を帯びて居る。カントは偉大なる評論家であつた。併しながら

カントを祖述する我が青年哲學者の論文の如何に獨斷的なるかを見るが宜い。イブセンは確かに偉大なる評論家であつた。併しながら、イブセンを崇拜する青年文藝家の作物の如何に獨斷的であるかを見るが宜い。評論の精神の十分に理解されない内は、何んなに、西洋の文明を輸入しても、其れは單に其の形體に止まつてしまつて、決して其の精神を移植することは出来ないといふことを、自分は嚴肅に世上の論者に警告したいと思ふ。

殊に自分が怪訝に堪えないのは、最も新進の氣運を宣傳する使命を受けて居るやうに言ひ做して居る青年自然主義者の言動が、極めて獨斷的なことである。自分は自然主義の意義と、價値とに關しては相應な理解と鑑賞とを有つて居るつもりであるから、確かに自然主義には現代に對して十分なる *raison d'être* のあることをも識認して居るが、併し自然主義は何處までも評論の精神に依つて動き、評論の精神に依つて戦はなければならぬとい

思ふ。評論の精神の無い自然主義は死其のものに過ぎない。併し自然主義も一度我が國に移さるれば忽ち頑迷不靈なる盲動となり、又惡闘となる所を見れば、自分は我が國の知的空氣が如何に評論の發生に不利なるかに驚かざるを得ないのである。併し前にも云つた通り、我が國に於ける四圍の事情は、すでに確かに評論が文壇の一勢力となることを要求して居るのであるから、自分は飽く迄真正なる評論の出現の爲めに微力を致さなければならぬ。

公 準

公準とは Posulate の譯語であつて、公準の性質及び作用を少しく説明して見ようとするのが本論の趣旨である。

昔アテンスに於て、時勢の推移するに隨つて、社會の組織と、個人の理想とに變遷を來たし、爲めに從來社會を維持し、個人を制裁するに與つて強大なる權威を有せし宗教も、政治も、はた道徳も、其の權威を疑はるゝやうに至つた時に、詭辯家なる一味の徒あつて、頻りに世の中に正邪、善惡の差別の虛妄なることを主張したのであつた。此の時に當つて大聖ソクラテスが彼等に答へて、彼等の謬見を破した所のは、古今に通じて苟も人の子によつ

てなされた観察の中で最も深遠にして最も精微なるものであると私は信ずる。其れはかうであつた。善と正義との存在を疑ふ諸君でも眼前に横はる國家の存在はよもや疑ふまい。併し國家の存在は是非とも善と正義との存在を假定する。なぜならば、國家の概念の中には自から善と正義との概念が含まれねばならぬ程に、國家の存在は同時に善と正義との存在を必須の要件として居るからである。是れはソクラテスが詭辯家の懷疑を破つた論法であるが、何んでもかゝる理解と鑑賞とを以て事實を考察する方法を公準といふのである。而してあらゆる宇宙觀と、人生觀との眞偽を判断する最後の標準はこの公準の外にはない。

こゝにある經驗或はある事實を説明するに二つの方法があると假定する。直接に實驗して其の結果を五官に訴へ、而して何れの方法が最も事實に適するかを研究すれば、何れの方法が眞たり、偽たるかは即座に決せらる

るであらう。併し經驗或は事實の種類によつては、其の範圍が廣大なるが爲めに、或は其の關係が複雑なるが爲めに、容易く直接に其の結果を五官に訴へるやうに實驗できないものがある。其の場合に吾人のとり得る唯一の方法は、間接に其れを思想に於て實驗して、其の結果を想像によつて判断することである。而して社會、人生に關する問題には五官による直接の實驗を許さずして、思想に於ける間接の實驗だけを許す底のものが多い。公準はかゝる實驗を取扱ふに用ふる假設であり、原則である。

譬へば、こゝに個人の要求と、國家の命令とは終極齟齬するといふ見方と、齟齬せずといふ見方との二つがあるとする。個々の經驗よりすれば、何れの見方も各多少の實例によつて證明せらるゝやうであるが、根本の原則として、何れの見方をとるのが、一層よく實際の生活を説明することが出来るであらうかといふことになる。と、大局の立場より、個人の要求は國家の命令

を發展して居り、國家の命令は個人の要求を實現して居ると見なければならぬならば、どうしても、個人の要求と、國家の命令とは終極齟齬とする見方より、一致するとする見方が一層よく是の目的に適するのであつて、たとひ、たまには、一寸見ると反證の擧るやうな出來事があるにしても、なほ個人の要求と、社會の命令とは、根柢に於て一致するものであるといふことを公準とせねばならぬ。

孟子の性善説も、荀子の性惡説も共に道德の事實を説明する公準である。道德を全體と見て、人間の性は善であるを見ると、惡であると見ると、何ちらが最もよく道德の事實と歴史とに合ふか。性善の假定と、性惡の假定との勝敗はたゞ、効果によつて決せらるべきである。而して善とは生活を維持することをいふに過ぎずして、惡とは生活を破壊することをいふに過ぎないならば、永久の傾向としては、もとより性善の假定を以て、性惡の假定より

一層よく道德の事實を説明して居るものといはねばならぬ。

是の外、人間の活動のあるところ、人間の職業のある處、過去の經驗と、事實とに基いて、ある公準を立て、其れによつて活動、又は職業を統一しようとして居らないものは一つもない。

五と七との和は十二に等しとするのも、圓は無數の邊を有する多角形であるとするのも、AはBに等しとするのも、社會には必ず正義が存在しなければならぬとするのも、晴天ならば明朝も亦太陽は東方に顯るべしとするのも、等しく公準である。吾人は過去の經驗より、かく考へ、かく行ふ方が一層生活を統一するに便利であることから、遂にさう考へ、さう行ふことを生活の要件とするに至つたのである。

こゝによく注意せねばならぬことは、公準は事實に基くが、事實其のものではないといふことである。強いて事實といふならば、靜的に知覺に

よつて認められた事實にあらざして、動的に志向によつて統一された事實であるといへば云へる。つまりスピノザの言葉をかりていへば、*Sub specie aeternitatis*に見られた事實である。併し *Sub specie aeternitatis* に物を見るときは、その差別を無視して、それを見ることではなくして、その特殊を征服して、それを見ることである。而してかく見しむることは生活の持続と發展とを求むる人間の根本欲に他ならない。人間がある公準を立てる時には、決して我儘勝手に其の都合よき事實のみを見て、其れに都合悪るき事實を見ないのではない。凡ての事實を悉く取入れ、其等の關係を説明するに足ると思はるゝ所の見方を公準とするのである。今前に引いた例をとつて來ると、若し人間の性が善なるものならば、實際に惡の行ひをなして居る人の在る事實を如何に説明するかと問ふものがあらう。此の場合に性善を公準とするものは、よし偶々の事であるにしても、先に立てた公準で此の事實を

説明せねばならぬ。もとより性善の公準も、人生に個々の過失、或は個々の罪惡の現はるゝことを否定することは出来ない。公準はたゞ其等が絶えず人間の自力によつて訂正せられ、改善せらるゝ事實を力説するのである。性善を主張する公準によると、性は善でありながら、如何にして惡が存し得るかといふことは説明できる。併し性惡の公準より出立して、性惡を主張すると、如何にして善なる事實が生ずるか少しも説明できない。

人間によつて創説せられ、懷抱せらるゝ見解にして、もとは生活に現はるるある事實に其の根柢をおかないものは一つとしてない。たゞ淺人の淺慮よりして、一時の状態を永久の傾向と錯察し、局部の側相を全體の事實と誤解するが故に、こゝに先の事實は全くの空想と化し去るのである。其等の見解や、學說の眞偽を判斷するに最も便利にして、確實なる方法は、其等を公準として、實際の生活を説明せしめて見ようと試みることである。この

思想上の實驗によつて多くの誤謬は其の眞價を暴露して來る。

今日我が國の文界及び學界に行はれて居る謬見、誤説の如きは其の數多くして、一々之れを擧ぐるの煩に堪へぬ。併し其等の眞價を暴露する捷徑は、其等が根本の眞理、或は事實として主張して居る懷疑とか、煩悶とか、無理想とか、無解決とかいふものを、何れでもよいから持つて來て、其れを公準として見ることである。其れだけの事實が説明し得られるか、どうかによつて、其の價値は定まるといふものである。是等の見解の何れを公準として見るも、誰れも其の莫迦氣さ加減をつくづく感得しないものは一人もあらずまい。さうすると、直ちに其れに反對して、生活の根柢に會得、安立、有理想、有解決の存在を認める見方が正當なる公準として成立つこととなる。さうしても、なほ個々の事實としては、時々の經驗に入り來る個々の懷疑、個々の煩悶、個々の無理想、個々の無解決の發現を全然無視するのでは無い。而し

て苟も發現するからには、相應の理由あり、權威あることは云ふまでもないから、特殊の議論としては、之れに對して相應な説明を與へ、評價を與へねばならぬ。併し根本の原理として、人生の根柢に會得、安立、有解決、有理想がないならば、懷疑、煩悶、無理想の如きものも到底發現し得ぬものであることを力説するだけである。靜止が運動の一様式である如く、停滯が進歩の一様式である如く、懷疑、煩悶、無理想、無解決は會得、安立、有解決、有理想の變形に過ぎぬとして説明するのが、最もよく生活統一の目的に適ふと云ふだけである。歴史的に、社會的に、心理的に何故そんな變形が時々でも生ずるか、と云ふことは、私の力でも説明し得ると思ふが、兎に角公準なるものは實行上の方針であるから、其の價値は一切其れが生活統一の道具として有する効果によつて判斷さるべきものである。而して其れとしては、人生の根柢を懷疑とか、煩悶とか、無理想とか、無解決とか觀る見方は到底公準とする

價値はないと私は云ふのである。

哲學の將來

一三側面からの考察が必要である

私は此處に「哲學の將來」といふ題目の下に、將來に於ける哲學の成り行きを三つの側面より考察して見たいと欲ふ。三つの側面とは、即ち

一 將來に於て哲學は尙ほ存續するものであらうかどうか、
一 若し存續するものであるとしたら、それは如何なる作用を社會に有するであらうか、

一 更にその作用がかくくであるか、決まつた上は、そのやうな作用を有する哲學は、如何にして組織せらるべきであらうか、

等である。

將來に於ける哲學の成行きを研究して、出來得るだけ徹底した成果を得るには、如何してもこれ等の三側面からの考察は必須のものであつて、その何れの一つをも缺くことは出來ないと私は信ずる。

二、將來に於て哲學は尙ほ存続するものであらうか

今日は急轉直下の時代である。物に依つては、現代に於て十年の間に関する變遷は、過去に於て百年に亘つて閱したもののよりも尙ほ酷だしきもののあるのは決して珍らしくはない。随つて、過去に於て當時の必要に應じて生じた機關にして段々に不要のものとなつたものも澤山ある。して見れば、多くの機關の一つなる哲學が將來に於て尙ほ存続するものであるか、どうかと問ふことは意味あることであると思ふ。假令推論の結果それが存続するものと肯定され得るにしても、それは十分なる事實に依つて證明

さるべき事柄であつて、初めより先斷によつて假定さるべき事柄ではない。

哲學は過去の文明の遺物に過ぎない。必ず早晚科學に依つて取つて代はらるべきものであると、コントやクリップフォードは斷言して居る。總べて人間の努力に依つて造られた機關の生命は、たゞそれが生活を支持し、豊富にする間だけに限らるべきものとする、近世生活に對して哲學が貢獻したところのものと、又科學が貢獻しつゝあるところのものとを公平に商較した所のものは、何人でもコントやクリップフォードの見解に多分の理由のあることを認めなければならぬと思ふ。哲學と科學とは、人生に對して大に異なる役目を有つて居る者であるから、何時でも兩者の効力を比較することは甚だ難しいとは云ふものの、現代に於て廣く深く、強く、人生を支配して居るあらゆる勢力を経験したものにあつては、人生に光明と幸福とを齎す上に於て、今日哲學は到底科學に及ばないといふことは、容易に彼れの

心頭に先づ起る直覺であらう。少なくとも近く過去二三世紀に於ては、哲學は常に科學に引率されて來た趣がある。畢竟するに、コントやクリッフォウドは、この争はれない事實に依つて彼等の見解を立てたものである。

併し彼等の爲した斯かる斷定には、二つの見免すべからざる誤謬が含まれて居る。その一つは既成の哲學に對する誤謬であつても、一つは人生と哲學との關係に對する誤謬である。

彼等は過去に於て創設せられた哲學が、近世に於て、それが應用せらるゝ場合を失したつて、一概に哲學は空疎なるものである、多くの虚偽を含んだものであると、絶斷して居るが、これは彼等が哲學の本來の性質を知らないことから來たつて居るのである。哲學は如何なる時代に出現したものであつても、生活の統一的原理であつて、決して彼等が考へた如く、事物の發生的説明ではない。さうすると、哲學は常識と争ふものでもなく、科學と争ふ

ものでもなくして、常識と科學との缺陷を填補するためを生じたものである。哲學が生ずる前に、既に常識や科學は吾人が見る如き宇宙や、人生を造つて居る。哲學は決して常識や科學の造つた經驗に超越して、別に新に經驗を造るやうな不思議な力はない。たゞ其等の缺陷を満たし、不足を補つて一層渾然たる世界を造らうとするだけである。そして、それだけのことは、異なる時代に於て、異なる要求に應じて造られた哲學は總べて優に爲して居る。

生活するといふことは人間の有てる唯一の目的たるには相違ないが、彼れはそれを達するに多數にして、且つ斷えず變遷する慾望に便つて居る。此處に方便たる慾望を正しく生活の目的に適合せしめて行くには二重の努力を要することとなる。それは同時に起る慾望の關係を調和することと、前後に續く慾望の様式を齊整することである。而して調和し、齊整す

る方と、調和され、齊整される方とは、共に無数の段階を造つて居るが、最後の段階に於ては、調和され、齊整される側面を代表するものは、常識や、科學であつて、調和し、齊整する側面を代表するものは、哲學である。

して見ると、人間の性情にして急に一變せざる限は、時々起る矛盾と、分裂と、破綻とを防いで行くには、如何しても未來永劫常識と科學との上に、哲學がなければならぬと私は信ずる。何となれば、常識と、科學とは如何に人生に大切なものであつても、個々の慾望や、活動を代表して、生活全體を代表せず、生活全體の利害の上より打算して、個々の常識と、個々の科學とを調和し、齊整するのは、獨り哲學であると思はるゝからである。

かゝる理由に依つて、私は將來に於て哲學は尙ほ存続するものであると斷言するものである。

三、將來哲學は如何なる作用を社會に有するか

文藝が人生の批評であるといふのは、マシユウア、ノルドの意見であるが、私は若し世の中に人生の批評たる尊稱を受くる権利のあるものが一つでもあるならば、それは必然に哲學であらねばならぬと信ずるものである。人生批評たらんには、常に人生全體の活動を觀察し、人生全體の意義を會得して居るものでなければならぬが、それを十分にして居るものは、獨り哲學のみである。されば哲學は、タアレスが世界は水であるといひ、ピタゴラスが世界は數であるといつた當時より、既に嚴肅なる意味に於て人生の批評となつて居つたのである。何故ならば、斯かる命題は吾人より見れば、如何に粗笨のものやうであつても、彼等の經驗の教ゆるところに隨つて、タアレスは水が萬物の根本であると考へることに依つて、彼れの生活の方針を得、ピタゴラスは數が萬物の根本であると考へることに依つて、彼れの生活の方針を得たからである。その後ソクラテス出で、プレトウ出で、アリスト

ウトル出でて、漸く哲學の成立に含まれた論理的経過が明らかになり、隨つてその人生の批評たる職分が大分理解されかけたのであるが、中世紀に到るまでは、兎角絶對主義に囚れて居つたのを見ると、哲學が眞に人生の批評として其の作用と勢力とが十分に發揮されて來たのは、ロック及びカント等に依つて批評主義が創設された以後の事と見なければならぬ。

若し今私に廣く上下四千年の思想史に就て語る餘裕があつたならば、系統的に哲學の進行を説いて、色々面白き觀察も出來ようと思ふが、いまその餘裕なきを遺憾とする。併しながら、いまその全體の傾向を總括して之れを一言に云つて見れば、哲學はしばしば多くの失敗を重ね、多くの迷路に徨ふたるに拘らず、絶えず一つの方角に進んで來たといふことになるのである。それは、即ち、哲學の唯一の目的は、社會生活に於ける個人の活動を自由にし、充實にすることであるといふことを段々に自覺して來たことである。

その理由からして、哲學史に就て、何處に一つの横截片を取つて見ても、何時でも後に來たつた系統は、其れに先立つた系統よりも、一層具體的となり、一層理想的となり、一層作用的になつて居るのである。

今も、昔も、哲學にして哲學であらん限りは、それは等しく經驗の中に普遍を發見し、生活の中に理想を發揮することを努めねばならぬ。併し昔と、今とは普遍及び理想に對する解釋を非常に異にして居るのである。昔は具體を超越することに依つてのみ普遍は發見せられ、嗜慾を壓迫することに依つてのみ理想は發揮せらるゝもの、と考へたのであるが、今は具體を總合することに依つてのみ普遍は發見せられ、嗜慾を統一することに依つてのみ理想は發揮せらるゝものと考へらるゝに到つた。言葉でいつて見れば、ただこれだけであるが、併しこれが何の位昔の哲學と、今の哲學との性質を異ならしめて居るかといふことは、少しく事理を解するものの會得すると

ころであらう。

人間が生活を持続し、豊富にするために、従事して居る百般の活動と、經營して居る百般の職業とはあるのであつて、それ等は如何なる權威を以てするも、人間の性情にして一變せざる限りは、その一部といへども破壊することも出來ず、中止することも出來ないものである。其處に人間一切の價値も、意義も見出されるのであるから、將來の哲學は益々この事理を知つて、己れの職分を定めて行かなければならない。而して、それは、これ等百般の活動や職業をして、益々反省的ならしむる一事に限らるゝと思ふ。されば、現實を大觀するが、それを超越せず、現實に觸即するが、それに陥没せずして、絶えず反省の源泉となり、動力となへて、現實と漸近的關係を保ちつゝ、永久に進むが將來の哲學の職分であらねばならぬ。

四、將來の哲學は如何にして組織せらるべきであらうか

將來の哲學は廣義に於ける人生批評であらねばならぬとすると、それを組織する方法はこの見地から當然支配されるべきである。嘗て經驗の論理的改釋を哲學と見做した時代もあつた。その結果は、絶對主義の産出であつた。又經驗の心理的改釋を哲學と見做した時代もあつた。その結果は、經驗主義の産出であつた。又經驗を改釋するに、先の形式論理學と、分子心理學とを折衷したものを用ひた時代もあつた。その結果は、批判主義の産出であつた。プラグマチズムの産出は一層高き實用の見地より、有機的に論理的見地と、心理的見地との填補總合を圖り、論理學を心理學化すると同時に、心理學を論理學化した結果である。併しこれ迄に出現したこれ等の系統は、何れもまだ人生評論たるの資格を以て居らない。もとよりこれ等で哲學が取り來たつた段階は、孰れも尊重すべきではあるが、私はそれ等に加へて、さらに經驗を歴史的傾向と、社會的事實とより改釋を試みる必要が

あると信ずる。つまり廣く材料を歴史上の傾向と、社會上の事實とより取り、その中に心理的意義と、論理的努力とを索めようとするのが人生評論たる將來の哲學の志向であり、方針であらねばならぬ。

ニイチエのザラツストラを論ず

初めてフロイドリッヒ、ニイチエの名が我が國に傳はつたのは、已に十年の昔となつた。その間まゝ、一二彼れの所説に就て之れが論議を試みたるもなかつたではないが、不幸にして彼等の多くは、凡手であつたがために、ニイチエを祖述すると、爭議するとに論なく、何れも群盲が全象を髣髴するに等しく、遂に彼れの眞頭骨を捕捉し得ず、随つて彼れの眞意義を發揮し得ずして止んだのであつた。されば彼れの創設に係る『超人』の言葉のみ世間に流布せらるゝこと久くして、彼れの思操と、情向とに關しては、まだ一つの聰明なる解釋も、又は一つの高邁なる批評も出たのを聞かない。

併し、今日世上に喧傳せられて居るライブニッツ、ヘーゲル等に關しては無論のこと、古來人口に膾炙され來たつた老子、荀子等に關してでさへも、その皮相のみ記誦せられて、その眞味に到つては尠しも體認せられたことななくして、猶ほ晏如たる我が學林及び文壇のことであるから、ニイチエに關しても、その理解の斯くの如く貧弱にして、その鑑賞の斯くの如く落寞たるのを見ても、私は別に不思議とも何とも感ぜはしない。たゞ、私は平常我が祖國の文運を開拓し、我が同胞の生活を充實するには、確かに現に在るよりも、一層文藝の覺悟を深酷にし、學術の精神を強烈にすることを急務の一と信じて居るものである。それや、これやで、語らるゝことのみ徒に多くして、識らるゝことの極めて尠なきフリードリッヒ・ニイチエの所説に關して、一度はその意義を闡明し、その價値を斷定したいと志して居るが、業は僅かに其の緒に就いたばかりであつて、今漸くザラツストラの一篇を讀み了つたに

過ぎない。それで、追つては彼れが事業の全體を評價することとして、こゝには暫く、その一部なるザラツストラを批評することとした。

ザラツストラは通例超人の福音を鼓吹することを唯一の目的として書かれたものと考へられて居る。而して形式的に見れば、いかにもそれに違ひはない。ニイチエは一個の哲人として、詩人として、はた通人として、彼れの深奥なる智慧と、銳利なる直覺と、博大なる經驗とを將ゐて、社會にありとあらゆる事相の批判を試みて居るが、彼れの言明に従へば、彼れはこの社會をして、一日も早く超人の出現し得る素地たらしめんが爲めにさうして居るのである。超人そのものの性質に就いては、全篇を通じてあまり多く説明されて居らないやうであるが、兎に角彼れが超人の出現を、社會の有ち得る唯一無上の目的として居つたことは争はれない。さうして彼れが繰り返へし、繰り返へし、人間は終に己を超越せざるべからざるものであるとか、

人間は超人に到る一つの橋梁に過ぎぬとか述べて居るのを見ると、ザラツストラ一篇は超人實現の志向に依つて全然支配せられ、他の種々の觀察と感想とは、たゞこの最後の目的に到達する方便に過ぎないとしか見られぬかも知れない。而して淺人の淺讀と、俗人の俗解とは確かにザラツストラをさう見るに違ひない。併し私は眼光ザラツストラの紙背を透す程のものの識力著者の心裡に徹する程のものは、そこに全然區別さるべき二つの要素のあることを看取するであらうと信ずる。一つは現代社會の批評であつても一つは超人出現の憧憬である。現代社會の批評の方は生氣ある志向より發して、その性質科學的、實驗的であり、超人出現の憧憬の方は朽廢せる理想より來たつて、その性質形而上學的、空想的である。前者はニイチエが現代社會の病弊を診察し、これが治療の方法として案出したものであるから、獨立してもその意義は十分であるが、後者はたゞ前者に動力と、標的と

を與へるために工夫されたに過ぎないから、孤立しては何等の價值をも有するものではない。併しながら、ニイチエはたゞに沒批判的に是等の兩要素を混同して居るのみならず、又詩歌的に、且つ神祕的に、強いてこれが渾和に努めて居る。

是等の二要素を暫く二種の系統と見て、その發生の順序を稽へるに、現代社會の批評が先づ成つて、而して後之れが指標として超人出現の憧憬が思ひ付かるゝや否や、それは忽ち科學的、實驗的なる現代社會の批評に反應して、大いにその性質を變更し、後には著者自身も、是等の二種の系統の緣起を忘れて、超人出現の憧憬が目的であつて、現代社會の批評は纔かにその方便に過ぎないと想像するに至つたのである。斯くして、推理と想像との誤謬に陥つた著者は、折角的確なる方針を以て出立しながら、遂には散漫なる結果に終つたのであるが、是れはよく舊式に屬する哲學者にあることであつ

て、獨りニイチエのみに限られたことではない。

過去の思想史より一々實例を擧ぐるのは、その煩に堪へないことであるから、此處には老子、ブレットオ及びスピノザの三人を擧げて置いたならば、讀者は、私が如何なる事實を指して居るかを容易に會得せらるゝであらう。いふまでもなく、是等の思想家が、初め哲學上の考察を始める動機は、當時の生活を批評し、改造することの一事に在つたことは明らかであるが、之れが方便として一たび生活の中より、それを統一するに足る意義を摺取し來たるや、否や、忽ちこれを外化し、物化して、もと統一的原理としてのみ有効なるべきものを、實在的物件となし了つたのである。この結果として、是等の人の學説は、その實は人生の批評であるのであるが、皆誤つて假りに宇宙の解釋たる形を取つて居る。是れが爲めに學説と人生との間に何の位矛盾と、齟齬と勢力の消耗とを來たして居るか解からない程である。尤も是等

三子者の場合に於ては、當時の生活状態よりして、多少の無理はあるにしても、斯かる思索の方法が、比較的有効であつたと認めらるべき理由は十分あるが、それとは非常に生活状態を異にした時代に棲息したニイチエの場合に於て、猶ほ彼れが何の必要もなく、たゞ漠然と先きの三子者の所爲を襲套して居るのは、實に許容すべからざる失態と云はねばならぬ。

事實斯くの如くであるから、現にあるがまゝの形體に憑つて察すれば、孰れが首たり、孰れが尾たるかを識別すべからざる程に、紛糾錯綜して居るが、確かにその價值を異にする二種の要素の彼れの學説に含まれて居ることは分明である。それであるから、今私がザラッストラを批判するに方つて、超人出現の憧憬と、現代社會の批評とを別々に論議し、而して最後に是等二部の功過を精算するのは、全體の價值を斷定する上に取つて、方法の最も其の當を得たものと私は信ずるのである。

批判の鋒は先づ超人出現の憧憬に對つて發せらるゝであらう。

今日苟も變遷し發展することを特色として居るあらゆる事相を統一するに、何が一番有効なる方法であるかと問ふならば、何人と雖も第一に指を進化論に屈するであらう。進化論は其初め生物上の事實を解釋する方法として創設されたものであるが、今ではそれが應用の範圍は無限に擴大せられて、人間の經驗に入り來たる、在りと有らゆる萬有の事實を解釋する方法と思惟せらるゝやうになつた。特に反省と改造とに頼つて生活する人間上の事實に關しては、進化論が最も有力なる方法となつたのであつて、言語、宗教、政治、法律、工藝、學術等一として進化論に依つて解釋されて居らないものはない。併し私が遺憾に堪へないことは、平常進化論を唱道し、又それに雷同して居る人士等が、進化の意義をまだ十分に會得せぬと思はるゝことである。

原と進化は生物がその生存を持續し行くために、己れを周圍に順應せんとするから起る事實であるから、進歩は總かにその結果であつて、その本質はどうしても順應そのものであらねばならぬ。生物は己れの生存を持續しようとする他に何の目的もないのであるが、周圍は絶えず變遷して居るから、この唯一の目的を達するため、生物は周圍の變遷する程度に準じて、また己れの構造を變更する必要がある。この結果は即ち個體及び種族の變化として現はるゝのであつて、この事實を進化と呼ぶのである。されば、たとひ進化の跡を釋ねて、その中に或る特定の聯鎖又は方向と見らるべきものが發見さるゝにしても、それはたゞ順應の経過が或る特定の様式に依つて行はれたといふことを證據立てるまでであるから、何もそれに對して驚嘆の聲を發することも、隨喜の涙を流すこともいらぬことである。併し如何なる場合に於ても、周圍に順應するといふことが進化の本質であると

いふことを忘れてはならぬ。

ニイチエは確かに誤れる進化論に囚れたる一人である。超人に關する彼れの一切の謬見は、悉くこの一つの病根より發して居るものと云つてもよい。超人の資格に就ては、ザラツストラ全篇を通じてニイチエはあまり説いて居らない。併し超人を實現するに必要な方法と努力といふものに就ては、ニイチエは大分言を費やして居る。或はニイチエが超人の資格に就いて語るところがあまりに漠然であるから、畢竟するに一つの空想に過ぎないとして非難するものが世間にあるであらう。超人なる概念が、如何なる心的鍊金術に依つて出來上がったかは追つて暴露するつもりであるが、私が超人に關するニイチエの意見に反對しなければならぬのは、假りにそれが何千年、或は何萬年先に於て確かに實現されるゝとしても、それを目的とするがために、現在の人間を方便としてしまふといふことは、大なる誤

謬にして、又少なからざる罪惡であるからである。まへに少しく述べた通り、俗學の徒に依つて進化と呼ばれて居る事實の中心は順應にあるのである。順應するには、自然に改造といふことが必要となつて來るが、それは順應するための改造であつて、改造自からは何等の價値もあるものではない。まして改造の連續を個々の場合より抽象して出來た進歩といふ概念に、何か大した意義があり、權威があるやうに考へるのは、實に生活の性質も、目的も全く知ることのなき愚人の愚見に過ぎないのであるが、驚くべし現今世間に行はるゝ人種改良又は社會改良を標榜する、所謂方案の多數は、斯かる愚人の愚見に其の動機を發して居るのである。

ニイチエは現代に生まれ現代の空氣を呼吸した人であるのに、何故に現代の精神を理解し得なかつたのであらうか。現代は種々の事情からして、個人が是れまでになかつた程に、人生の性質と、社會の組織とを理解して來

た時代である。この結果として、彼れは始めて十分に自己の權威の自覺を得たのである。今日行はれて居る百般の活動の特徴は、皆個人がこの新しき自覺を得た結果として説明されるのである。無邊の六合を通じ、無窮の天年に亙りて、自己が唯一の目的であつて、自己の他に何等の目的をも認めないといふのが、現代に生活する個人の覺悟である。尤も性情を同うし、目的を同うする多くの個人が相集つて、共同生活を營むには、各人は悉く自己を目的とするが爲めに、他人を方便とすると同時に、自己を方便として他人を目的とすることを力めて居るが、是れはたゞ斯くすることに依つて、初めて各個人は最も善く自己を目的となし得るといふことを、長き經驗より學んだからである。而して私は今日個人が有つて居るこの覺悟は、種々の事實に憑つて、その根柢する所の極めて深きを信ずるものである。されば、將來これが増大することはあらうとも、縮小するやうなことは決してない。

然るにニイチエは現代の個人に對つて、目的たる勿れ、たゞ超人の方便となれと熾んに説いて居る。人間は自己を超越せねばならぬ、人間は超人に達する橋梁に過ぎぬとは、彼れが到頭説くことを止めざる教訓である。

斯くの如きは、確かにニイチエが進化の根本義を誤解して、それは時々刻々に起る順應の經過にあるとせずして、遠き未來に於て現るゝ進歩の彼岸にあるとした結果であることは明らかである。何故にニイチエは吾人に取つて唯一の實在たり、無上の價值たる現在の個人に對絶の意義と權威とを發見し得ぬのであらうか。人間の思慮が瞬間に限られずして、未來にまでも擴がつて居るといふことは事實である。併し是れは、彼れと利害を分つがために、彼れの自己の一部と考へるに至つた彼れの骨肉、朋友、隣人等が彼れの死後にも尙殘存することを知るからである。一口に云へば、人間が彼れの興味に依つて造る現在なるものは、過去に溯り、未來に達する程大な

るものであるから、その中核は必然瞬間にありながら、その外廓は自から過去と、未來とを包含して居るのである。何んな事をして、彼れの現在と全然没交渉なる過去と未來とに價値を見出だすやうな奇跡の行はれるものではない。この明白なる事實に反して、ニイチエは何萬年の先に於て超人を實現する爲めに、現在の生活を方便にして、了へと吾人に説くものである。

ニイチエは私のこの非難に答へて、『自分が現在の人間に對つて、超人の爲めに方便となれと説くのは、彼等をして一向に遠き未來に於て超人といふ壯嚴、美妙を極めたる一個の美術品を實現することに努力せしめようとするのであるから、つまり彼等の生活は、是れに依つて一層大いなる目的となつたのである』と云ふかも知れぬ。併し斯かる答辯は私に取つて何等の貫目もあるものではない。感覺又は經驗を超越する説話や教訓が人間の心を支配するに如何程微弱のものであるかは、誰でもよく知つて居る事實で

ある。これが證據には、天堂の幸福と、地獄の苦痛とは何千年と無く人間に對つて説かれたのであるが、その効果は今に猶ほ現世の刑罰と、報賞とに較べたならば、話にならない程微々たるものであるのを見ても解かる。人間は彼れの生存を持続するためには、日夜に彼れの全力を傾けても尙足らざるを覺ゆる程種々と爲さなければならぬ仕事がある。ニイチエに依つて、超人は人間の資力で企て得る最優、最美の美術であると説かれても、現在の彼等の生活と没交渉なる、彼等の想像することの出來ない程遠つた状態にある社會に於て、初めて實現さるべきそんなものの爲めに、どうして眞面目に努力することが出來ようか。現在の人間はそんなものに關して興味を有つことも出來ないし、またそんなものに努力する餘裕もない。

ニイチエは神々が皆死んでしまつたことを説いて居る。如何にも神々は死んでしまつた。これはいふまでもなく、人間が漸く自己の威力に對し

て信頼の念を増して来た結果、もはや何物に就ても神々に頼る必要がなくなつたからであることは、ニイチエも知つて居るであらう。併しニイチエは、どうして其初め神々が存在を有つに到つたかを知つて居るか。それは人間が現在の生活を維持するに全力を注ぐことを怠りて、目前に實現せられざる空望を玩弄し、終にそれを外化し、物化し、人化し、神化した所産である。併しニイチエの超人なるものも、その由來に於て、その性質に於て、その功德に於て、彼れが荐りに其の滅亡を促がして居る神々と少しも違つたところはない。私はニイチエが超人の出現を憧憬して居る間は、神々を咒咀する權利は彼れに少しもないと論ずるものである。

ニイチエは僧侶が社會に害毒を流した罪惡を鳴らして居る。併し彼れ自身が已に僧侶ではないか。彼れの事へる神は『超人』であり、彼れの唱へる咒文は『創設』であり、『轉價』であり、『善惡の破却』である。彼れの神と、彼れの經

典とを取つて之れを基督教の其等、或は佛教の其等に比するに、私は其の非實的なる點に於て、其の抽象的なる點に於て、或は劣るあるも、決して優るところあるを見出だすことの出來ぬものである。

ニイチエは地上に執着すべきことを教ふる者であつて、是れは甚だ結構なことである。それがために、彼れは基督が地上を愛すること足らずして、蚤くこの世を去つたことを惜んで居る。併し其の實ニイチエ自身あまり地上を愛しては居らぬのである。たとひ超人は、今吾人が現に住んで居る地上に於て實現さるゝものであるといつても、それが何千年、或は何萬年後になつて初めて來たるものであるならば、それは吾人が現に興味を置いて居る地上と同一のものではない。やはり空想に根ざす樂園や、天國と等しきものである。嚴密なる意味に於ける地上は、獨り吾人の各々が己れを目的として經營して居るところの地上に限られねばならぬ。

ニイチエはまた繰り返へして『創設』とか『轉價』とか『善惡の破却』とかいふことを説いて、これ等の言葉には何か重大なる意味が含まれて居るかのやうに考へて居るが、併し是れも亦彼れが進化の意義を誤解した結果に過ぎぬ。罪惡と墮落との多くは、人間が習慣に愛着して、これが改造を嫌ふより來たつて居るのであるから、俗衆を率ゐる一代の導師たるものは、常に新しき生活の方針を作り、而して之れを弘める心掛があらねばならぬ。併しこれは何時でも改造の形を以て現るべきであつて、且つその様式はそれが適用さるべき實際社會の要求に依つて決定せらるべきである。嘗て英國の名士グラッドストーンは天才ホオマアの事業を評して『彼れは水蒸氣を四圍の民衆より取り、これを雨と化して再び彼等に還へした』といつたが、これは宗教に於ける政治に於ける、道徳に於ける、工藝に於ける、はた學術に於けるあらゆる天才の事業の特色を云ひあらはしたものである。總じて生活に

生じ來たる罪惡と墮落とを防がうとするならば、改革は大切である。時としては非常なる改革も必要である。併しそれは何時でも民衆の満足を増加し、幸福を進捗することに依つて保障せられねばならぬ。ニイチエは若りに『創設』と『轉價』と『善惡の破却』とは、それ自身に大した價值があるやうにいつて居るが、これは確かに彼れが俗人の俗見を受けて、よく進化の意義を極めず、徒にその説を崇拜して居るのである。

ニイチエは『創設』するといひ『轉價』するといひ『善惡を破却』するといつて居るが、若し是等の努力にして何にも様式を有たぬものなら格別だが、或る様式を必然に有たなければならぬものならば、彼れはそれを決定するに方針を何處から取つて來るか。つまり現在社會の趨勢によりて暗示せられたものより他にはないではないか。して見れば、如何に極端にこれを試みるも、畢竟するに創設は改造であり、轉價は改價であり、善惡の破却は善惡の修

正であるといふことに歸するではないか。

若し空漠なる標準を立て一切の色彩を無視し、關係を没却し、さうして實際生活を支配しようとする企が形而上學的であるならば、ニイチエの實際生活を支配しようとする企は、確かに形而上學的であるといはねばならぬ。ニイチエは已に宗教的であつて、又形而上學的である。斯くあつても、まだ天下に一人でもニイチエを新しとするものがあらうか。

以上で私はザラストラに含まれた一要素なる超人出現の憧憬に關して、少しくその價値を批判し得たと信ずるから、是れより論鋒は自から、一つの要素なる現代社會の批評に向つてその價値を批判するであらう。

前にも述べた通り、事實は現代の批評がニイチエ一代の事業であつて、それが手段として、超人の憧憬が化醸されたものである。併し著者が現にザラストラを書くに當つては、彼れの念頭には超人の實現が目的となり、現

代の批評が手段となつて居つたのである。それがために、大體からいふと、超人の憧憬の方は空疎にして迂遠なるに反して、現代の批評の方は精悍にして切實なるものであるが、折角に慧敏なる觀察も鈍り、明快なる忠言も曇つた觀がある。それに拘らず、彼れが現代社會のあらゆる事相を對象として、忌憚なくその病弊を暴露し、大膽にこれが治療の法を講じて居るところには、實に驚嘆に價するものがある。

彼れの廣汎なる智識と、博大なる興味と、犀利なる直覺とは、彼れをして優に人世批評家の資格を得せしめたのである。されば、彼れの目的としたところは、素朴にして現實を尙び、強健にして生を愛し、豪毅にして地上に執着するところの人間を造らうとするところにあつたのであるが、この福音を説く爲めに、彼れは彼れの心裡に映じたところに隨つて、現代社會に存立するあらゆる事件と、物件とを批評して居る。斯くして彼れは現今の宗教と、

政治と、道徳とを非難し、學者と、詩人と、市人とを卑下して居る。而し獨り彼れが賞讃に與つたものは戦場の勇士のみである。

若しザラツストラを通じて彼れが現代批評の價値を窺ふとするものがあるならば、彼れの先づ知らなければならぬことは、ザラツストラは散文詩であつて、決して科學の書でないといふことである。さればそのいふところの多くは、正確を缺き、誇張に失するやうに見えても、どれだけまでが著者の思索法に屬し、どれだけまでがその發想法に屬するかといふことは、彼れのものした他のあらゆる著書を商較するにあらざれば、容易に斷言出來ぬことである。何故ならば、詩の本來の作用は、事件を説明して、人の理解を開發するよりも、その意味を諷誦して、人の鑑賞を鼓舞するにあるから、同一人でも散文を書く時と、詩を書く時との氣分は大いに異らざるを得ないからである。先づ是れだけのことを承知した上で、私は彼れの社會批評の價

値を少しく吟味したいと欲ふ。

私は超人出現の條下に於ては、彼れを空想的である、非實である、と罵つたのであるが、いま社會批評の條下に於ては、彼れを實驗的である、具體的である、と考へねばならぬ。

ニイチエは何故に極力宗教と併せて、其の運用者なる僧侶を攻撃するかといふに、それは人をして何處々々迄も彼れが愛着しなければならぬ地上を忘れて、實際の生活に何等の効力をも持ち來たさないのである。反つて彼れの勢力を消耗する天國を憧憬せしむるからである。諸々の神は既に死んでしまつた。最早人間は神を拜む必要はない。彼れが敬さなければならぬのは獨り人間の前途のみである。天國も一つの空想となつてしまつた。天國に懐るゝのは無益である。それよりも人類が共に終始せなければならぬところの地上を愛することが肝腎である。千載の英靈漢基督

も惜しい哉壯年にして此世を去つてしまつたから、未だ十分に地上を愛することを知らなかつた。若し彼れにして、も少し生きて居つたならば、一層地上を愛することを知つたであらう。斯かる理由でニイチエは僧侶を以て此世に於ける最大悪人であると論じて居る。かゝる素朴にして、單純なる觀察が、得て公平を失し易いのは自然であるから、過去の社會に於て、偉大な勢力と効用とを有した宗教と、それを司る僧侶とが、猶ほ現代の社會にその餘命を保つ以上は、それ相應の理由が社會の方にあるに違ひない。併し大體の趨勢より見て、私はニイチエの意見に同意せざるを得ないものである。勿論ニイチエの如く過激なる非難に依つて、一時に宗教と、僧侶とを絶滅することは六ヶ敷いと信じて居るが、徐々に外よりは社會生活をして、宗教を容るゝの餘地なからしめ、内よりは宗教を開發して、他の活動に接近するようになさしめなければならぬ。

然るに人類の趨勢に味き矮人の群が、如何なる心得か、今日に於て猶ほ衆愚を騙して、再び宗教を盛んならしめんとして居るのは實に怪しからんと思ふ。是等の輩に對して、ニイチエの熱罵は甚だその當を得て居るものと思は思ふ。

ニイチエの考へに依れば、宗教と聯關して、今日の道德も既に頽敗し盡して、殆どその用を爲さないものとなつた。昔德と稱せられたものは、今では人間の力を削ぐものと成つてしまつた。それ故に吾人は眞に人間たらんとせば、舊き德の刻まれた石版を壊して、新しき德の刻まれた石版を新たに建てねばならない。舊き德は善惡に依つて行爲の價值を決めたが、それよりは尊卑の標準に依つて行爲の價值を決めねばならない。この理由でニイチエは絶えず善惡の破却といふことを唱へて居るのである。善惡の破却といつても、何も行爲を訓練する方法と、行爲の價值を批判する標準とを

一切無くなしてしまふといふのではない。たゞ新しき方法と、新しき標準とを作り出さうとするのである。

何故に善悪の標準が悪いか。いふまでもなく、それは現代に生活する吾人にとつては有害無益となつたからである。此の世に在つて、吾人の第一の義務は強くなるといふことである。併し舊き道徳は、昔の時代に於ては知らぬこと、今の時代に於ては、反つて人間を弱くする傾がある。例へば人間を分つて、理性と肉體との二つとし、肉體を卑しんで、理性を尊んで居るが、併し肉體の保存と、強健とのために、初めて理性が出来たのではないか。されば肉體は理性より更に大なる理性であらねばならぬ。世の道徳家は五官とか、靈魂とかを肉體よりも尊んで居るが、併し是等は肉體の道具たる外に目的を有つものではない。

然らば、新しき道徳は如何なることを鼓吹するかといふに、一口にいへば

強健なる全人となりて、更に己れよりも強健なる全人を己れの子孫として此世に遺して行くことである。その資格は、卑しむべき快樂を輕蔑し、勞作に堪へ、正直であり、大膽に老朽した習慣や制度を破却して、その代りに新しきものを建て得る等である。

此處にも、著者の觀察には多くの誇張が含まれて居る。又著者は現存の道徳を批評するといひながら、その實、十八世紀以後歐羅巴を動かした道徳思想は餘り會得して居らないやうである。併しながら、著者は獨逸に於て、かゝる言を爲して居るのであるとすると、大分その急所を撞いて居ることは疑はれない。たゞ著者に對つて私がこゝで告げて置きたいのは、著者の言は一向に世の頑迷者流の猛省を促す爲めとならば格別、著者の想像するやうな改革は到底行はるべきものではない。又理論としては、一層深奥、中正にして、且つ一層實際に行はれ得る形に於て、既に文明諸國の新進の學者

に依りて唱へられて居り、既にその感化も上流の識者の間に認められて居るといふことである。

次に政治に對するニイチエの意見を窺はふ。

ニイチエが國家に對して疑悞の念を懐くことは、決して彼れが宗教や道徳に對してさうであるのに一步も譲らない。否更に甚しきものがある。彼れの意見に従へば、國家は尊大野蠻たゞ個人を凌辱することを以て己れの役目として居る。昔ルイ十四世は「朕は國家なり」といつたさうであるが、近世の國家はこの口調を學んで「國家なる我れは人民なり」と叫ぶ。國家は一つの虚偽である。されば人民が勝手になるならば、誰も國家を理解するものはない、たゞ憎むだけである。斯くの如き見地よりして、ニイチエは「國家止んで、始めて人間あり」とまで極言して居る。

私は國家をさう悪しきものと見ることは出来ない。私は最悪の國家で

も、まだ皆無に勝ると信ずるものである。露西亞に住むトルストイも國家を呪咀する一人であり、獨逸に住む著者も亦その一人である。これ等の人は歐洲に在つて、久しく上にある帝王及び權臣が國家の名を藉りて、己れの野心を満たし、或は己れの私腹を肥さうとして、無名の戦争を起したり、無益の土木を起したりして居るのを見馴れて居るから、自然國家に對してかくまで嫌憎の念を抱くに到つたのであらうが、私は國家に對して一層大なる意義と作用とを認める者である。マシユウア、ノルドは嘗て「自分は格別政治そのものには價值を置いて居らぬ。たゞそれが平和を保障し、平和のないところには、自分が價值を置く藝術も、修養も生ずることが出来ないから、随つて政治に價值を置くのである」といつたが、私はマシユウア、ノルドと意見を異にするものである。私は政治そのものが、既に最高なる修養の機關であると信じて居る。吾人は國家を有するが故に、初めて秩序を尙び、

他人と共同することを學ぶのである。私はニイチエにしてもう少し國家の意義を知らなければ、到底正確に社會の如何なるものでも評價することは出来まいと思ふ。

ニイチエは平等の思想を排斥するところの論者である。勿論平等は事實ではない。たゞ理想である、空想である。而もその空想が過去二百年間、事實であるやうに誣ひられて居つたのは不思議ではないか。斯かる不能を少き程度に於て實現しようとした結果、下層のものを引き上げずして、上層のものを引き下げることとなつた。私もニイチエと共に平等の思想には反對である。併し私は『轉ぶものは打ち倒せ』といふニイチエの福音は信ずることは出来ない。たゞ私は抽象的概念に依つて出来た平等の思想の代りに、相助の思想を主張しようとするものである。

ニイチエは、なほ學者に對つては小さき知識に誇ることを戒め、詩人に對

つては小さき感情を弄ぶことを責め、市人に對つては小さき損得に溺れることを詰つて居るが、獨り軍人に對しては彼れの勇氣は眞に慈善よりも世を救ふに與つて力あつたと賞めて居る。是等の觀察も、ニイチエの事として、皆格言的の形式を取つて居るから、見やうに依つては、辯護も出来るし、又反對も出来るが、兎に角その後景として、現代生活が横はつて居ることを知れば、是等の觀察にもそれ〴〵多大の妙味はあると思ふ。

斯くニイチエが、一方に宗教、道德、政治等を非難し、他方に學者、詩人、市人、軍人等を批評するのも、何の爲めであるかといへば、詰りニイチエの考へに依れば、超人出現の境遇を造らんがためである。併し超人なるものを、必ずしも千萬年の先に於て出現するものと、ニイチエに依つて想像されて居る半神半人の怪物としないでもよい。現今及び最近の將來に於て生活する模範的人物と見ても差支ない。而して事實として、ニイチエは斯かる人物を

知らず識らずの間に抽象し、醇化して超人なるものの概念を造つたのである。然らばかゝる手数を掛けて出来上つた模範的人物の資格は如何なるものであるか。いま諸所に散見するところの断片的文句を拮取し、集合し來たれば、大抵左の數項の下に總括されるゝことが出来ると思ふ。

- 一、彼れは宗教上の信仰に溺れずして眞面目(moral)であらねばならぬ。
- 一、彼れは飽くまで地上を愛せばならぬ。
- 一、彼れは健全なる身體を有たねばならぬ。
- 一、彼れは豪毅なる意思を有たねばならぬ。
- 一、彼れは勞作を愛せねばならぬ。
- 一、彼れは正直であらねばならぬ。
- 一、彼れは快樂を排斥せねばならぬ。
- 一、彼れは子孫の發展のために己を犠牲にすることを喜ばねばならぬ。

等つまり八條である。

是等の資格は、孰れにしても、勿論悪い筈はないが、特にその或るものは、確かに現代社會の病弊を救ふに極めて緊要なるものである。併し嘗てアリストオトルが描いたアテンス市民の理想的資格、或はカアヂナル・ニューマンの描いた英國紳士の理想的資格に較べると、何となく高風と、優雅とに於て大いに缺けるところがあるやうに思はれる。

最後に超人出現の憧憬と、現代社會の批評とを合してザラツストラ全篇の價值を判断せんに、先に一と度述べた通り、超人出現の憧憬の要素は抽象的、非實的であつて、現代社會の批評の要素は、具體的、現實的である。一口にいへば、前者は形而上學的であつて、後者は科學的である。而して此書の特徴は、これ等の相容れざる要素が纏綿して、科學的要素に空想的の色彩を傳へ、形而上學的要素に内證的の調子を與へて、人をして何處まで信じ、何處まで

で疑つてよいかには惑はしむる點にあると思ふ。

兎に角、廣汎なる經驗と、犀利なる直覺と、高邁なる見識とを兼有せる哲人にして、同時に詩人たり、通人たる一大天才が、眞面目に現代の病弊を診斷し、これが治療の方法を講じようとして、一生の心血を注いで書かれたものが此のザラツストラであるから、世に若し砂中に黄金を拾ふに等しき勞を厭はぬ人があるならば、全篇を通じて、彼れの教ふるところのものは決して少なくないと思ふ。

文明史上に於けるロオマンチズムの意義

ロオマンチズムは通例纔に過去の一事件(A thing of the past)としか考へられては居らぬから、私が今改めて之れに對して一つの考察を費すといふことは、全く時代違ひの試業であると思はれるかも知れない。併しながら哲學の學徒にとつては、此の世の中に一つとして、是れこそ全く過去に屬するものであると云ひ得るものはないのである。

生活なるものは必然に過去、現在、未來を貫いて一體であるから、過去は如何ほど遠いものであつても、猶現在の中に入つて、其の一つの要素となつて居ることを彼れはよく知つて居る。されば現代の寶を索める爲めに、彼れ

は、絶えず過去の淵に潛むことをする。詰り哲學の學徒にとつては彼れの興味を引く凡てのものは、必然に古くあり、同時に新しくあるのである。其れであるから、人間の生活が今日持てる特徴を持つて居る間は、哲學の學徒より見れば、或る事件の出現した時代が、幾百年或は幾千年前にあつたといふやうなことは、其れが現實として持つて居る價值に何等の相違を來たすものではない。吾々が其れに對して興味を感じ得るといふ事實が、已に其れが吾人によつて研究されるだけの價值を持つて居るといふことを證明して居るのである。併し古い生活の要素が新しき生活の要素となつて居るは、それがそこに新しき作用をなして居るからであるから、哲學の學徒たるものの義務は、明確に是の新しき作用が如何なるものであるかといふことを見極めるにある。之れを稱して事實の真相を發見するといふのであるが、これはたゞにある事實が発生した當時に於て、當時の人々が其れを観察

し、評價した通りに觀察し、評價しただけでは到底其の目的が達せられるものではない。

真正なる歴史は二十年毎に書改めらるべきものであるといつた人がある。是れは過去の出來事は如何なるものにしても、現在の生活にある意味を有するやうに解釋せられることによつて始めて事實となるのであつて、其れまでは、たゞの素材又は象徴に過ぎないといふ眞理を言明したのである。是の意味に於て是れまでロオマンチズムは種々の人によつて、種々な研究が積まれて居るが、私が事實と認め得る立場よりは、まだ一度も研究されて居らぬといつて宜しい。其れで私は現代に生活する哲學の一學徒として、名稱としては古いが、事實としては極めて新しいこのロオマンチズムに關して、新しき觀察と、評價とを試みる必要があると信じたのである。従來ロオマンチズムといふ言葉は、主として文藝の様式又は理想を言

ひ表すことに限られて居つたのであるが、私はこゝに此の言葉の用方を押し擴めて、生活の様式又は理想を云ひ表す言葉としたいのである。勿論文藝は生活の一部であつて、ある時代に於て生活一般に現れる様式又は理想は、自から其の一つの發動なる文藝にも現れて來るのであるから、ロオマンチズムを單に文藝の様式又は理想と見ても、ある程度までは其の意義の解らないことはないが、併し其れを文藝と合せて、凡ての活動の根柢なる生活の理想又は様式とすると、更に其の意義が明かになると信ずる。而して事實として、文藝がロオマンチズムの精神によつて支配されて居つた時代には、他の活動も多くはロオマンチズムの精神によつて支配されて居つたのである。

ロオマンチズムを生活の一つの様式として観ると、其れは人間が已にある經驗と、制度とを有しながら、ある事情によつて、其等に飽足らぬやうに

なつた爲めに、未來に於て、其れと異なるある經驗と、制度とを立てようとするめては居るが、如何に古き經驗と、制度とを改造して、其れを新しき經驗と、制度とにするかといふ方法の發見せられざる時期に於て表るゝものである。さうするとロオマンチズムについて語るに先立ち、ロオマンチズムの分化し來たる生活の一般様式なるものについて、少しく語る必要がある。

何が生活の一般様式であるか。何をさうとるべきであるか。私から見ると、生活といふものは、其れが現に活らいて居るまゝに取られると、非常に複雑であるやうに見えるが、併し其の根本的特色といふものは極めて單純で、且つ極めて明瞭なものである。私は生活を定義して、一致の原理によつて種々の慾望を調和して行く不斷の經過であるとしたいと欲ふ。詰り生活といふことと、慾望の満足といふこととは全然同一の事件である。されば生活するといふことが、慾望を満足さするといふことより以上のある

ものであると考へたり、或は慾望を満足さすといふことが、生活すること以下のあるものであると考へたりするのは、全く事實を知らず、事理を辨ぜざる昧者の想像に過ぎない。而して已に色々の慾望が生活の方便であるからには、其等は必然に互に相協同し、又た互に相填補するやうに活らいて居らなければならぬ。其れで經濟の法則に従つて、一方にはなるたけ少き勞力によつて、なるたけ多くの効果を收めん爲めに分業の事實が起ると、他方には其れより自から生ずる孤立と、矛盾との弊を矯める爲めに統一の意義が生じて來るのである。固より是等の二側面は、初めから人間の生活の根本性に含まれて居るので、こゝに至つて其れが顯著になつただけである。斯くして生活の目的は單一ではあるが、其れの經過は二重となつて現れるのである。是等は即ち支配するところの理想と、支配されるところの嗜慾とである。而して私は人間の性質が其の重なる特徴に於て今

日あるまゝに残る以上は、此の様式は永久確定のものとして續くであらうと信ずる。

人間が種々の慾望を持ち、其等の慾望を公正に満足さして行くことが生活其のものであるとすると、どうしても充實せる生活は、一方には慾望の強烈なる要求があると同時に、他方には其等を統御する理想の嚴正な權威が存するものと見ねばならぬ。是れだけは人間の生活の概念の中に當然含まれて居るのであつて、人間の生活が人間の生活であるかぎりには、殆ど是れ以外の組織で動らくといふことは、到底私の想像の及ばぬところのものである。されば統一の側面が大切であるからと云つて、其の權威のみを無限に擴充したならば、生活は遂に其の動力を失つて了ふであらう。又其れと同様に、分化の側面が大切であるからといつて、其の要求のみを無限に増大するならば、生活の體系は終に壞れて了ふであらう。昔より今に至るまで、

人間の生活は幾返となく其の特徴を改めたやうではあるが、未だ嘗て一度も慾望の満足といふことを目的としなかつた時代はなかつたと同様に、之れを達する方便として、支配するところの理想と、支配されるところの嗜慾との二要素にたよらなかつた時代は全くなかつたのである。

人間の生活の根本性は上に述べた輪廓の中にあると信ずるが、是れまで其れが閱歷した徑路によると、二つの重なる様式が見出される。而して二つの中の何れの様式に依るかといふことは、全く理想と、嗜慾とのどちらに一層大なる價値を置くかといふことによつて定まるのである。若し人間が理想の方に一層大なる價値を置く時には、生活は保守的となるのであつて、之れに反して、もし嗜慾の方に一層大なる價値を置く時には、生活は進歩的となるのである。前者の極致はクラシ、ズムによつて表され、後者の極致はシンボリズムによつて表されて居ると私は信ずる。今歴史に現れた

事實によつて之れを徴するに、希臘の生活は即ちクラシ、ズムの體現であつて、前世紀以後に於ける文明國の生活はシンボリズムの體現である。私は人間の生活の典型はどうしても是等クラシ、ズム及びシンボリズムの二つに限られて居つて、ロオマンチズムは纔に前の様式より後の様式に移りかはる時に現れた一時の變體であると信ずるのである。斯ういふ譯であるから、ロオマンチズムの性質を明かにする爲めには、尙少しくクラシ、ズムと、シンボリズムとの性質を明かにして置く必要がある。

私は曩きにクラシ、ズムは保守的社會の生活法であるといつた。保守的社會の特徴は過去に作られた標準は萬人にとつて妥當のものであると容認し、各個人はなるだけ其れに服従することによつて、生活の幸福と、良心の平和とが得られることと信じて居つたところにあるのである。勿論如何程さうしようとしても、彼れをとりまく境遇と、彼れを形作る有機體とは

次第に變らなければならぬから、是等の兩要素を融合することを唯一の職分とする各個人の努力は、自から彼れが全然服従して居ると信ずる標準に反應して、之れを少しづつでも變更して居るのであるが、これは唯不執意に行はれたのに過ぎない。各個人は飽くまで既定の標準に服従すること、生活の要義と考へて居ることは事實である。古代にあつては、希臘は慥かに他のあらゆる國民に優れて、自由研究と自由討議との精神に富んで居つた國民であつたに拘らず、一度彼等の哲學、文藝、美術等を調べると、彼等が如何に多くクラシ、ズムの方針によつて生活して居たかが知れる。是れを論理の方便で云ひ表した結果は、演繹法となり、形象の様式で云ひ表したものは抽象美となつて現れて居る。

演繹法の哲學も、抽象美の藝術も、共に生活の要義は如何なる場合にあつても、獨り個々の行爲を既成の法則、又は範疇の下に當嵌めることにあると

信じて居つたのである。尤もかゝる理想によつて支配さるゝ社會にあつては、普遍と特殊との間の統制の行はれることが久しくなるに隨つて、内面的に既成の範疇の意義は益々深くならなければならぬ譯であるから、希臘人が據つて以て生活した原則には、今から私どもが推測するものより一層深き意味があつたに違ひない。併し慾望は絶えず新たになるのに、其れを支配する標準はなるたけ過去に出來たものを用ひようとすれば、どうしても保守の傾向を生ずるに定つて居る。是れは生活を形作る二要素の一なる理想に重きを置いて居る生活の常態である。

上のやうなものも、勿論生活の一つの方法には違ひないが、併し此の外に其れと同じ位、或は其れ以上に賢い生活の方法はまだ一つある。其れは進歩的社會に行はるゝものであつて、シンボリズムによつて代表さるゝものである。

進歩的社會の特徴は、個人に新しき慾望が生ずるに随つて、其れを満足させる新しき標準を工夫するところにあるのである。事實如何なる場合でも、全然新しい社會、或は人生といふやうなもののあるべき筈はないから、如何に進歩的の社會でも、各個人が生活を始めるに當つて、彼れがとる標準は固より過去に出来たものであるが、其れは彼れに取つてはたゞ試験的のものであつて、各個人の慾望が自意識を得るに随つて、彼れは其れを最もよく自分の目的に適ふやうに變じて行かうとして居るのである。

吾人が今生活して居る社會が、シンボルリズムの精神によつて支配されて居るといふことは、現に行はれて居る政治、科學、美術等を見れば直ぐに解かる。宗教のやうな全く保守的社會に發生したものでさへも、其れが滅亡を避けるが爲めには、又ある程度までシンボルリズムの精神によつて變更されることを必要として居るのである。今日吾人は個々の色彩、知覺、感情より

他に實在はないと信じて居る。もし人間が色彩や、知覺や、感情より他の要素を生活に發見するならば、其れはたゞ是等のものを一層よく受用する爲めの方とすると過ぎないのであつて、終局の目的は、どこへまでも是等のものを十分に、且つ、完全に經驗する所にあると信じて居る。なぜ今日の科學は歸納法によつて支配されて居るか。なぜ今日の美術は音樂を其の理想の様式とするか。是等は吾人が現代に於て生活を形作る二要素のなる嗜慾に一層重きを置いて來た何よりの證據である。

かく説いて來ると、クラシズムの行はれる社會と、シンボルリズムの行はれる社會とは非常に異なるやうではあるが、其の實さう異なつては居らぬ。どちらにしても人間の生活である以上は、大體に於て、同時に起る、或は前後して起る個々の慾望を調和して行くことを其の唯一の目的として居ると見ねばならぬ。其れであるから、嗜慾の要求を蔑視したやうに見えるクラ

シ、ズムも、其の實はゆる方法に於て其れを満たして居たのであり、又理想の權威を無視して居るやうに見えるシンボリズムも、ある方法に於て其れを重んじて居るのである。詰り普遍の中に特殊を見出さうとするのがクラシ、ズムであつて、特殊の中に普遍を發見しようとするのがシンボリズムである。なほ同一事實を云ひあらはすに他の言葉を借りるならば、どちらも等しく平衡を成立たせようとして居るのであるが、クラシ、ズムは之れを靜的にしようとするのに反して、シンボリズムは之れを動的にしようとして居る。是れが兩者の異なる點である。

英國の才人ウオター・バジエオットはあの *Physics and Politics* といふ書著はし、一大創見を以て社會發達の徑路と、法則とを論じたのであつたが、その中で自然の順序として、造民の時代は是非とも討議の時代に先だ、なければならぬことを、事實により、推理にたよつて論じて居る。彼れがこゝで造

民の時代といつて居るものは、治者の權力によつて、被治者を威壓した時代のことであつて、討議の時代といつて居るものは、被治者が同時に治者の役目をとつて、相互の協同によつて社會の幸福を増さうとして居る時代のことである。かく見て來ると、是等二つの時代の精神は非常に矛盾するやうであるが、併し其の實は決してさうではない。何れにしても社會を形作る民衆の幸福を助長し、開發するといふことの他に目的はないのである。而して其の初期に當つては、兎角社會生活に於ける各個人の幸福や、利害の關係するところがまだ明かにならない爲めに、各個人はやゝもすれば漫りに他人の權利と衝突する自己の權利をのみ主張しようとしたのである。其の結果は社會生活の鞏固を危殆に陥らしむることとなる。そこで、他人より一層よく社會生活の要件を識得した立法家は、何より先に有力なる法律の力を借りて、各個人より共同生活に害ある嗜慾と、行爲とを取締かうとし

たのであつた。人間にとつて共同生活が如何に大切なものであるかを知つて居るものは、古の帝王が強大なる法律を作ることが、民衆の幸福を増進する最初的手段であると考へたことに、異議を挟むものは一人もあるまいと信ずる。

併し強大なる法律によつて秩序を立てるといふことは必要なる手段ではあるが、其れは最初のものであつて、決して最終のものではない。それであるから、造民の時代は自から次いで来る討議の時代を豫想して居るといふものである。一度民衆が強大なる法律によつて威壓され、秩序を重んずる従順なるものとなつた上は、其れより後は協議によつて各自己の慾望をなすだけよく實現する社會生活を作り出さねばならぬ。討議の時代は斯くして社會生活の頂點として現るべきものである。

こゝに注意すべきことは、造民の時代も、討議の時代も、詰りは其の時代に

生活する多數人の意志の發表であるから、何れも最もよく其の時代に適して居つたといふことである。されば個人の慾求を無視して居つたやうに見える強大なる法律も、其の實は個人の發展を助けて居つたのであり、個人の慾求のみを主眼とするやうに見える自由討議も、其の實は社會の鞏固を増して居るのである。何故ならば共同生活によつて自己の慾望を實現して行く人間は、如何なる場合でも、他人と協同するといふことと、自己の慾望を實現するといふこととは、必ず供へなければならぬ二側面であるからである。

クラシ・ズムは造民の時代の生活法であつて、シンボリズムは討議の時代の生活法であるとする、何故にクラシ・ズムがシンボリズムに先立つて起り、又起らなければならなかつたかといふことは明かである。社會の組織と、個人の性情とより見て、シンボリズムは最終の様式であらねばなら

ぬが、其の準備としてクラシ、ズムが必要であつたのである。

歴史に現れた事實に徴して、生活の方法は嘗てクラシ、ズムであつたのが、今日ではシンボリズムになつて居るといふことは明かである。而して是れは人間の根本性より自然にかくなつて來たのであるから、何時クラシズムの精神が止んで、何時シンボリズムの精神が始まつたといふことはいはれない。唯だ吾人の云ひ得ることはクラシ、ズムは何時かシンボリズムになつたといふだけである。併しながら、凡ての變遷なるものは、其の外形よりすると、如何なる時期も決して同一速力で進行するものでなくして、ある時期には緩慢であり、ある時期には急激である。また或時代は準備の時代と呼ばれ、或時代は過渡の時代と呼ばれて居る。クラシ、ズムよりシムボリズムに移つた運動に於ても、吾人はたしかに準備の時代と、過渡の時代とを見分け得るのである。過渡の時代は文藝復興より始まり、佛蘭西

革命に由つて終りを告げたと見れば大した誤りはないと信ずる。今私はロオマンチズム其のものの特色を敘述し、評價するに先つて、此の期間を通じて、何故にロオマンチズムなる一つの運動が起つたか、又其れを養成した事情はどんなものであつたかを少しく述べて見たいと欲ふ。

西洋の文明史によつて表示された所によると、有史以後の人間の生活は少くも六つの異なる様式を経過して居る。それは Empiricism, Classicism, Mysticism, Romanticism, Realism 及び Symbolism である。歴史研究の立場よりは是等の様式の特徴と、其の間の相互の關係とを論述するのも甚だ興味のあることではあるが、今は人文發達の全體を研究しようとして居るのではないから、クラシ、ズムの前にあつたエンピリズムと、ロオマンチズムの後に起つたリヤズム及びシンボリズムとは、こゝには擱くこととして、唯クラシ、ズムよりロオマンチズムに到る徑路にだけついて、少しく述べることにしよう。

少し形式的ではあるが、如何なる時代にあつても、人間の活動又は生活は慾望の二側面なる嗜慾と理想との調和であるから、命題の成式によつて言ひ表すことが出来ると思ふ。Sが即ち是れである。此の成式に於てSは嗜慾を代表し、Pは理想を代表する。

前にも述べた通り、クラシ・ズムは主辭によつて代表さるゝ嗜慾よりも、賓辭によつて代表さるゝ理想に重きを置いて居つたことは疑ひもないが、併し當時にあつては、兩者の存在は等しく認められて、其の間に融合を成立たせようとして努力して居たのである。ミシチズムになると、嗜慾を代表する主辭は殆ど認められないで、唯賓辭を代表する理想のみが認められたのである。更にロオマンチズムになると、是れまで無視されて居た嗜慾は漸く己れの権利を自覺し來たり、是れまで絶対の權威を持つて居つた理想に反抗の態度を執つて來たのである。こゝに至つて主辭と、賓辭とは

殆ど其の協同を破るまでに、分裂の状態を來たして居る。

クラシ・ズムの様式によつて生活して居つた希臘人は最も現實的の國民であつたのである。幸にして彼等は未だ現實と理想との分裂を知らなかつたのである。現世以外に未來があるとし、自然以外に超自然があるとするやうな考は、彼等の少しも知らなかつた所のものである。さればこゝで私が希臘人は嗜慾よりも理想を重んじて居たといふのは、只過去に作られた生活の方針を重んじて居たといふことに過ぎないのであつて、決して近世人のいふやうに、現實を離れたる理想なるものを尊んで居つたといふのではない。そんなことをするのは彼等の夢想することさへも出来なかつたことである。希臘人は個人の生存と、發展とは獨り社會生活によつてのみ、圓滿に實現さるゝことを知つて居つた。其れであるから、ソクラテスの哲學に於けるが如く、悲劇家の戯曲に於けるが如く、理想は何時でも社會

又は國家の意志であつたのである。而して是等社會又は國家の意志によつて個人の慾望を支配して行くことで、完全なる生活は出来るものと信じられたものである。クラシ・ズムが或る特殊の個人の態度或は經驗に興味を置かずして、凡ての人にとつて安定なる態度又は妥當なる經驗に興味を置いたのは、國家の意志に服従して生活する市民の一般の様式をかゝる態度又は經驗によつていひ表さうとしたのである。

然るにかくまで頼りにした社會又は國家は、段々にその權威と、鞏固とを失ふに至つたから、希臘人は遂に彼等の據つて生活すべき客觀の標準を一つも有たなくなつた。併し彼等はなほ自分の自然の經驗より得た光明だけに頼ることを不安心と考へたのであつた。是れが彼等をして段々に宗教的たらしめた原因であつて、此の傾向はやくストアの學徒に於て現れたのである。人間は原一つの神靈より發したので、人と人との間に存する

理解及び同情は、全く此の神靈の特性を頒つた結果であるとして見て來たのである。かく人間の義務を考へて生活することは、一定の國家によりて要求せらるゝ個々の義務を盡し、個々の職分を行つて生活するよりも餘程抽象的であるから、隨つて、其れだけ個人の行爲は彼れに特殊の慾望を満足させ得ないものとなつたと見ねばならぬ。

國家の權力が段々に薄弱になり行く時に當つて、其の後多くの世紀間歐洲の人心を支配する運命を有した基督教は、希臘及び羅馬に入つて來たのである。この強大なる宗教は、長い間猶太の神祭政治によつて養成された複雑なる教理と儀式とを持つて居つたから、國家に代つて人心を支配する點に於て、遙かにストア學派の學說に優る所は多かつたのである。かくして吾人が見る如き中世紀の生活方法が現れたのである。其の特色とするところは、人間は肉慾を方便として生活しなければならぬのに、肉慾を排斥

し、現世にのみ生活し得るものでありながら、現世を非難するやうな矛盾極まるところにあるのである。

基督教の教へた生活方法は實に不思議極まるものであるが、併しその發展の徑路を尋ねれば、相應な理窟は發見出来る。人間が國家の勢力の下に、制度とか法令とかを遵奉して、生活して居るにしても、詰りは自己が長き經驗によりて發見した理想で嗜慾を支配して行つて居ることに歸するのである。併し生活の方針が外より來る制度とか法令とか云ふ形を取つて居る間は、其等を適當に遵奉すれば、嗜慾は自から適當に支配されて居るといふ意識又は信頼があるから、日常の生活を營む外に別に嗜慾の性質を吟味する必要はない。併し一度さういふ外來の制裁や、條規がなくなると、正當なる行爲を實踐するには、各人自からある方針を發見することが必要となる。而してまだ慾望の性質が明かにならなかつた時代に於て、過失に陥る

まいとする工夫の努力は、どうしても嗜慾を滅殺し、縮小するといふ結果となつて現れる。固より人間である以上は幸福とか、平和とかを求めるところは、矢張中世紀の基督教徒の目的であつたに違ひないが、其れは彼等によつて、少數の慾望の爲めに多數の慾望を犠牲にすることによつてのみ得られるものと考へられたのである。彼等が靈と肉、現在と來世とやうに區別したのも、よく吟味すると、詰り慾望又は慾望の排列の種類を二分し、彼等の必要とした生活方法の立場より、一方を現世又は肉とし、他方を來世又は靈と稱したに過ぎない。

斯くの如きは眞に神祕主義によつて支配されて居つた生活の特徴である。前に引いた論理の命題に照らすと、神祕主義の行はれた社會に於ては、理想を代表する賓辭のみが重要と見做されて、嗜慾を代表する主辭は殆ど其の存在さへも認められなくなつたのである。此の時代に於て社會が乾

燥枯淡の甚しきものとなり、工藝學術等一切地に落ちて了ひ、生活の内容は纔かに生命を續けるに缺くべからざる動作に止まるまでに衰へて居つたのも少しも怪しむに足らぬ。

幾世紀間かゝる無味の生活を送つたのも、固より幸福と平和とを獲得するのに其れに優つた方法を知らなかつたからである。慾望を出来るだけよく満足さしたいといふのは人間の根本性であるから、却々百年や千年の偏狭なる生活によつて之れが一變し得らるゝものではない。それであるから、若し一度復た自然の方法によつて、慾望を正當に發見する道が見出されたならば、人間は必ず争ふて是れに就くに相違ない。實に文藝復興の時代は此の機會を人間に與へたのである。

文藝復興は文字の示す如く、其の外観は是れまで久しく忘れられて居つた希臘の文明の復活である。長い間基督教理の陰鬱なる眼鏡を通じてば

かり自然と人生とを見て居つたのに、彼等は復た二たび希臘人の用ひたる透明なる眼鏡を通じて、生氣潑瀾たる自然と人生とを見ることが出来たのである。其の結果として、久しく沈滞を極めて居つた工藝學術は一時に勃興した。

不自然なる人生觀を脱却するに、彼等は希臘人の創設した人生觀を借りたが、彼等は希臘人の人生觀に還らずして、別に新生面を開いたのである。此の特殊の結果は、長い間の生活を通じて自然に生ずる人間の生理的機關、及び心理的機能の變更より來つたのである。

新しき人生觀とは他でもない。生活を形作る二要素に就き、理想より嗜慾の方へ一層の重きを置いて生活しようとして來たことである。而して是の方針が十分に實現されるれば、即ちシンボリズムとなるのであるが、併し一つの人生觀が已にあるのに、他の人生觀が新たに現れ出でた場合には、何

の矛盾も衝突もなく、一方から他方へ易々と移り行くものではない。こゝに必ず兩者の間には分裂が起る。反抗が生ずる。此の経過は即ちロオマンチズムである。

是れまでロオマンチズムに就いて敘述し、或は論議したものは決して少くはない。併し私から見ると、其等の總てが何れも或は明確を缺き、或は徹底を缺いて居るのは、彼等は皆ロオマンチズムの動機を發見しようと思はずして、僅かに其の發現のみを觀察して居つたからである。言ひ換へれば、ロオマンチズムを生活の一般様式と見ずして、只に文藝上の、或は政治上の一理想としてのみ考へて居つたからである。なる程ロオマンチズムには是れまで史家が數へ擧げたやうな種々の特色のあるのは事實であるが、其等の特色の由來を求めることなく、唯に是等を列擧しただけではロオマンチズムの真相は決して解かるものではない。併し是れに反して、

もし吾人にして一度ロオマンチズムの根柢たる精神を理解する時には、何故にロオマンチズムが其等の特色を有つに至つたかといふ理由が明かになり、随つて其等の特色の意義も一層明かになつて來る。

ロオマンチズムがクラシズム、又はシンボリズムよりも一層多く感情の發動に興味を置いて居るといふことは、何人といへども同意する事柄であつて、もし特別の意味に於て、世の中に感情の文學、或は感情の政治と云はれ得るものがあるならば、其れはロオマンチズムの所産であると云つても宜からうと思はれるが、然らば何故に文明の一時期に起つた文學、又は政治が、他の時期に現れたそれ等に優りて特にさうあるのであるか。ロオマンチズムの研究より、ある積極的結果を得ようとするならば、先づ此の點より研究してかゝらねばならぬと信ずる。

感情の性質に關する私の見解に就いては、先頃或る機會で少しく述べて

置いたから(『道徳經驗に於ける情的評價の作用及び制限』参照)こゝに再び詳しくは繰り返へさないことにするが、觀念が生活の道具として、分化して來た事實よりして、凡ての觀念は必ず知力と感情との二側面をそなへて居る。而して知力は觀念の客觀的統制を司り、感情は其の主觀的評價を司る。さうすると如何なる生活の様式でも、其れが知力の側面を有すると同様に、必然に感情の側面を伴はなければならぬことは極めて觀易き道理であるが、知力も感情も時によつて靜的に活らくと、動的に活らくとの相違は慥かにある。生活の改造が圓滑に行はれる時は、知力も感情も靜的に活らき、又其れが行はれるのに險惡を極める時には、知力も感情も動的に活らき、又ある。クラシ、ズム又はシンボリズムの支配する時代に於ては、知力と感情とは靜的に活らき、ロオマンチズムの時代に於ては是等は動的に活らくのである。併し唯だ此の事實よりクラシ、ズムとシンボリズムとの時

代に於ては生活に感情の要素が少く、獨りロオマンチズムの時代に於ては其れが多いと考へるのは、生活の事實を知らざるより來たつた謬見である。是れをある特殊の經驗に照らすに、今こゝに一人の旅人があつて、山中に於て俄かに猛獸に出遭つたと假定する。其の場合に、もし彼れが手に武器を持ち、而して其の武器によつて敵を倒すことが出来るならば、彼れは大して感情の動搖を感ぜぬであらう。併し其れに反して、彼れが不幸にして手に武器を有せず、或は持つて居つたにしても、其れによつて猛獸を倒し損つたならば、彼れはこゝに大に感情の動搖を経験するであらう。但し此の事實よりして、前の場合より、後の場合に入り込む感情の方が多いと獨斷すると、大なる誤謬に陥ると思ふ。凡ての行爲は知力によつて支配さるゝと同時に、感情によつて評價されねば眞の行爲とはなり得ないのであるから、是等の場合の何れにも感情が活らいて居ることは疑ふことが出来ない。

たゞ一つの場合に於ては、其れが浮いて活らき、他の場合に於ては、其れが潜んで活らいて居るばかりである。是等の事實より歸納して、方便が目的に叶ふ場合には感情は潜んで活らき、方便が目的に叶はない場合には感情は浮いて活らくといひ得ると思ふ。

斯く見て來ると、何故にロオマンチズムの時代に生じた文藝又は政治に於て、特に感情の要素が顯著になつて居るか、と云ふことは直に解らなければならぬ。其れは他でもない。一口に云へば嗜慾と理想との間に分裂を生じて、目的を達すべき方便が缺けて居つたからである。人間が生活を持續して行くには、どういふ風にかして方便と目的とを齊整せねばならぬ。併し其處に一つも妥當な標準が存在せぬならば、是れは獨り生活を持續するに必要な興味と努力と、理解と、鑑賞とを根柢として、過去に起つた經驗、未來に起り得ると思はれる經驗、自國に行はれて居る生活、他國に行はれて

居る生活等、あらゆる種類の經驗と、生活とを見聞の達する限り、想像の及ぶ限り、參照し、反觀することによつてのみ得られるのである。何故さうすることが必要であるかと云はゞ、さうすることによつて、始めて彼等の實力の範圍内に於て、出来るだけ豊富にして、妥當なる生活の方針が発見せられ得るからである。ロオマンチズムの起るのは、何時でも現在に適當なる生活の方針が一切なくなつたからであるから、ロオマンチズムが現在の社會のものは、宗教にしても、政治にしても、藝術にしても、悉く卑めると云ふことは當然のことであるが、其れと同時に、或は過去の宗教、或は遠き蠻地の生活、或は全く想像よりなる未來の社會に憧れるのは、其の外觀は兎に角、其の志向はどこまでも現在の生活を持續し行くに必要な生活の方針を発見しようとするにあるのである。過去の宗教や、遠き蠻地の生活や、又は空想に基ける未來の社會が、其れ自身に何の價值もあるのではなからぬ。

人が熱心に、且つ大膽に新しく生活の方針を搜索し、或は創設して居る時には、必ず其の影響は知力の方面に於ては反省となり、感情の方面に於ては煩悶となつて顯れるものである。

人間は時として随分異なつた境遇に新しく投ぜられることもあるやうではあるが、如何に異なつて見えても、ある意味に於て、なほ過去に於て、彼れが興味と努力とによつて作つた境遇に過ぎないから、彼れにして、もし大いなる反省と煩悶とを費すことを苦とするならば、比較的無難作にでも新しき方針は立て得られる。併しさうして出来たものは、或は輕薄であつたり、或は偏狭であつたり、或は奇矯であつたりして、到底新しき境遇の凡ての要求に應ずることが出来ないことが多い。其れで、多くの場合に於て、ある一つの方針より他の方針に移る時には、ロオマンチズムの時代を経由することが甚だ大切となるのである。

生活に於て、知力はその客観的關係を統一する道具として、感情は其の主観的價値を評判する道具としてのみ存在の理由を有するものである。詰り是等二つのものは生活を持續し、發展する方便に過ぎない。併し方便が目的に對して價値を有するところから、往々方便其のものが目的と誤解される、ことがある通り、反省と煩悶との作用はロオマンチズムによつて始終正當に理解されて居つたとは云はれないので、其の實甚だしく誤解されて居つたのである。現に、亞米利加印度人の生活を慕つたコンスタンもある。既に化石となつた羅馬教を復活しようとしたジョセフ・ヂュ・メエストルもある。空虚なる理想國に憧れたシエレエもある。其の他ウオズウオスにせよ、バイロンにせよ、シャットオブリアンにせよ、セナンクウルにせよ、皆知力と感情とを以て現代を補正する道具とせずして、却つて其れを非難するものとしなかつたものはない。労働の福音を説いて「汝に最も近き義

務をなせ』と疾呼した『サアトル、レサルタス』の著者さへも、やゝもすれば現代の缺陷を補ふの道は過去を復活させるにあると考へたのである。

併し是れはロオマンチズムを唱へた個々の思想家から見るからさうなつて居るのであつて、文明を繼承し行く時代精神より見れば、是等の人の思想は皆將に起らんとする生活の方針を豊富にし、充實にすることの他に何の職分もなかつたのである。其れであるからロオマンチズムを一つの志向として見れば、其れはどうしても新しき生活の方針を發見し、創設することを其の唯一の目的として居るといはねばならぬ。

是れまでの歴史家によつて、ロオマンチズムは其の前に先立つたラシヨナリズムに反對して起つた運動であると考へられて居る。併し、かく狭く、淺く、ロオマンチズムを解釋することには私は大に反對するものである。私はラシヨナリズムと、ロオマンチズムとを一つ運動の二側面であ

る、随つて相填補して居るものであると見たいのである。

前に述べた通り、文藝復興は文明史を横斷する分水嶺となつて、こゝにクラシ、ズムの終りを結び、シンボリズムの源を發して居る。而してロオマンチズムは一方より他方に移るに必然なる過渡の生活方法であるとする、文藝復興の運動の中にロオマンチズムの持てる凡ての特色の發見さるゝのは極めて自然のことである。文藝復興は老朽せる生活方法を捨てて、清新なる生活方法を始めようとすることを唯一の目的としながら、其の發動は自から二つの側面をなして居る。其れは功利的見解より生活を改良しようとした側面と、審美的鑑賞より生活を豊富にしようとした側面とである。前者は科學及び工業の勃興によつて代表せられ、後者は藝術及び道德の覺醒によつて代表せられる。併し是等は自己擴張の單一なる運動が世界に體現する時に、必然にとる所の二側面である。後に至つてラシ

ヨナリズムと呼ばれ、ロオマンチズムと呼ばれて居るものも、畢竟するに是等の二側面の繼續に過ぎないのである。されば私は今全く相反對する外觀を有するロオマンチズムと、ラシヨナリズムとは如何なる風に必然に一つの體系を作つて居るかを説明したいと欲ふ。

人間は唯生きたい、よく生きたいと云ふ欲望の他には、一つの欲望も持たない。而してよく生きるには事實として種々の欲望が必要であるが、併し是等の凡てのものは皆同一の目的に役立つものであるから、俗人の考へるやうに、あるものは肉に屬し、あるものは靈に屬するといふことはない。併し生活が複雑なる様式を發展して來るに隨つて、行爲の齊整は功利的と審美的との二つの立場よりせらるゝことが最も有効であるやうになつて來る。個々の行爲を正確に作るには功利の基礎でなければならぬが、行爲と行爲との關係を圓滑にするには、どうしても審美的標準によらなければ

ならない。而して人間が生活して行くには、行爲の間の關係を圓滑にして行くことよりも、個々の行爲を正確にして行く方が直接の必要がある。何故ならば後者の存在は如何なる場合にも假定されなければならないが、前者の存在は唯行爲の間に矛盾が生じた時にのみ必要であるからである。

生活の方針が變更せらるゝに當つて、其れが先づ功利の基礎に於て企てられ、而して後それが審美的標準によつて完くせられるといふのは極めて至當のことである。どちらにしても最後の目的は新しき生活の方針を立てるといふことに歸着するが、そこには自から二つの段階がある。生活の輪廓を形作る學術、經濟政治等の變更が初めに企てられ、其れが濟むと、仕上げとして審美的立場より、藝術、道德、宗教等の變更が試みられるのであるから、是等の兩種の變更が其の終りを告げて、始めて生活の變更が遺漏なく出來たと云ふものである。併し是等の努力に對して、古き生活の方針より來

るところの反動に至つては、大いに其の趣きを異にする。

生活の機關たる觀念は其の性質上悉く客觀的關係と、主觀的鑑賞との二側面をそなへて居るが、曩に私は觀念の種類によつて、あるものは他のものよりも多く客觀的關係を有し、其れに反して、あるものは一層多く主觀的鑑賞を有して居ると云ふことを云つたが、生活の功利の側面を司る觀念は一層多く客觀的關係を有するものであつて、其の審美の側面を司るものは一層多く主觀的鑑賞を有するものである。此の事實よりしてラシヨナリズムも、ロオマンチズムも大體に同様なる目的と手段とを有しながら、何故にラシヨナリズムは過去の科學や、經濟や、政治を破壊しながら、猶大して何等の反抗をもうけずして直線的に進行したのに、一度ロオマンチズムが藝術や、道徳や、宗教に對して同じことをなさうとすると、色々の妨害に出遭つて、紆餘低徊せざるを得なかつたかと云ふ理由が明かになると信ずる。

此の相違あるが爲めに往々俗人によつてロオマンチズムはラシヨナリズムに對して起つた反動と誤解されて居るのであるが、其の實は、兩者共に相填補して居るのであるといふのが私の主張である。

功利とか審美とか云つても、詰りは生活の持續と發展とを目的として居るのであつて、たゞ便宜上生活の末梢に注意すると、其の中心に注意するによつて二つの立場が別れるのであるから、兩方は其の根柢に於て全然引き離すことの出来ないものであつて、一方の變更は、直ちに他方へ影響を與へることは極めて見易き道理である。ラシヨナリズムは生活全體の變更を揚言して居るが、其の實は實利の方面を認めることの急なるあまり、自から審美の方面を忘れて居るから、何時か此の忘れられた方面は殘滓となつて存する。ロオマンチズムは是の殘滓を新しき生活の方法の理想に改整する爲めに起つたのに過ぎぬ。

さうして見るとラシヨナリズムも、ロオマンチズムも、同一の精神より發した同一の運動の二側面であつて、共に新しき生活法を發見し、創設するに必要なものであつたのである。それであるから、その出現の時期よりすると、ラシヨナリズムはロオマンチズムの先に起つたやうになつて居るが、併しロオマンチズムが現れた爲めにラシヨナリズムは其の跡を絶つた譯ではない。兩者は新氣運を蘊細化醸し了るまで、互に填補し、匡正しつつ並立して居つたのである。當時に於ては是等の運動がたま／＼反對するものと見做されたが爲めに、個人としてはラシヨナリズムを排斥しようとしてロオマンチズムを唱道した者もあるし、又ロオマンチズムを卑下するが爲めにラシヨナリズムを鼓吹した者もあるが、其等の個人を機關として悉く包有した社會生活は更に大なる目的の爲めに是等二つの主張を方便として居つたことは明かである。

斯く手分けして、生活の異なる分野に革新の事業を創めたラシヨナリズムとロオマンチズムとは、各其の計畫の進み、其の志向の熟するに隨つて互に理解と信頼と、敬畏との程度を増し來たり、終に全然一致するに到つたのである。この結果は乃ちシンボリズムの成胎であつたのである。

東西文明の融合の意義及び經過を論ず

東西文明の融合なる熟語は、日露戦役の當時より、我が國に於て大に唱道せらるゝに至つた警句の一つである。素より自分はある意味に於ては東西文明の融合を以て將來の國是の最大にして、最高のものとしなければならぬと考へて居る者である。されば今東西文明の融合の必要が如何ほど識者に依つて鼓吹せらるゝも、自分はたゞ其の尠きを憾めばとて、決して其の多きを厭ふものではない。併し自分の見る所では、東西文明の融合と云ふことに對する彼等の理解と鑑賞とは大なる誤謬が含まれて居るやうである。

思索の方法に關して、現代に生活する吾人と、過去に生活した先人との相違の一つは、先人が事實を言語の奴僕として居つたに反して、吾人は興味を概念の君主として居る所にあると云ふのであるが、併し文字の爲めに精神を忘れるのは、人類に固有する一つの傾向であるから、吾人と雖も、全く君主たる興味を概念の奴僕と爲し、奴僕たる言語を事實の君主と爲すの窠臼を全く脱し得たとは云はれない。自分は其の適切なる事例を、東西文明の融合に對する世人の覺悟に於て見るのである。

今試みに東西文明の融合なる成語を外國語に翻すると、*The Unification of the Western and the Eastern Civilisation* となる。此の成語を淺薄に解釋すると、東洋に一つの固定の形を有する東洋の文明なるものがあり、西洋に一つの固定の形を有する西洋の文明なるものがあつて、是等二つの文明を一つの様式に融合することが、即ち東西文明の融合であるという意味するやうに解釋せ

られないとも限らない。而して現に今日東西文明の融合を唱道して居る論者の多數は、斯く解釋し、又斯く解釋せねばならぬと考へて居るらしい。併し、之れは取りも直さず、言語の爲めに事實を忘れ、概念の爲めに興味を曲げて居る者ではなからうか。事實は東洋にも數多の文明又は文明の形相があり、西洋にも數多の文明又は文明の形相があり、是等の數多の文明又は文明の形相を融合する様式も數多あるのであるから、此の事實を正確に言ひ表さんとするには、どうしても *Unifications of the Western and the Eastern Civilisations* の様式を借らねばならぬ。斯く理解して東西文明の融合なる成語は始めて意味を有し來たるのである。世上の論者の計畫の如きは、若し果して彼等にして計畫のやうなものを有し得るならば、事實に基かずして空想に基いて居るのであるから、到底實現せらるゝ見込はないのであるが、假りに其の一部分でも實現せらるゝものとしたならば、其の害毒は反つて全然

實現せられないよりも一層恐るべき結果を來たすであらう。されば斯かる計畫に超して、世界の文明を貧少にし、我が國の資力を脆弱ならしむるものは他にあるまいと自分は思ふのである。此の自分の宣言は何の説明も要しないほど平明なるものであるが、世にはなほ此の宣言を一つの晦冥なる宣託に類したものと見る人がないとも限らないから、自分は進んで少しく其の意趣を展開することを試みなければならぬ。

人間が、彼れの感想と、思索と、行爲とに依つて日夜酬酢し、應對する所のものは紛糾錯雜して殆ど端倪すべからざるやうに見えるが、畢竟するに是等のものを方便とする目的はただ一つであつて、自己の慾望を充たし、自己の生活を續くると云ふ他にはない。而して是れは獨り彼れの統覺を以て、彼れの境遇を整頓すると同時に、又彼れの境遇に依つて、彼れの統覺を劃限して始めて達せらるゝのであつて、吾人は此の事實を行爲と呼ぶのである。

而して人類の全體を形作る各個人は皆な悉く異なる統覺を有し、異なる境遇に置かれて居るから、兩者の融合を圖る行爲の方針は、自から人毎に異なるべきを得ない。併し同じ祖先より由來し、同じ地方に住居するが爲めに、類似の統覺を以て、類似の境遇に適應しながら、互に彼等の有無を交換し、彼等の長短を填補して來た個人の團體は、次第に彼等の間に共通なる、又は普遍なる生活の方針を得るに至つたことは、極めて自然のことである。此の傾向が増大するに隨つて、彼等は漸く一樣の政治と、一樣の言語と、一樣の道徳とを有つて來る。國民とは此の團體に付せられたる名稱に過ぎない。

されば假りに今日存在する世界の人類は悉く一つの祖先より發來し、彼等の置かれる境遇は、其の山河の形勢に於て、其の氣候の状態に於て、其の交通の便利に於て、其の寒暑の變化に於て、相隣りして生活する甲と乙との間の相違は、乙と丙との相違と等しく、丙と丁との間の相違は乙と丙との相違

に等しくあつて、また此の相違が判別することの出来ないほど微細のものであるとしたならば、最も大なる相違を有する人々は、地球を四分して、其の各の中心に位する所謂四人の對蹠人であることは明かである。而して是等の人々の中間に居つて、是等の人々を結付ける人々は、知覺すべからざる程度に於て、次第に相違して行くのであるから、彼等の趣味や、言語や、信仰や、社交やの相違よりして、一つの團體を他の團體より區別することは到底出来ないのであらう。されば實際あるが如く、種々の獨立せる國民の存在し得る必要條件は、是非共一の地方と、他の地方との間に、地理や、氣候や、天候やの點に於て、截然たる間隔があり、而して一地方だけを取つて見れば、大體同一の地理や、氣候や、天候やの支配を受けて居ることであらねばならぬ。斯やうな境涯に於いて、初めて一つの團體を形作る個人は、他の團體を形作る個人よりも、多く共通の性情を養ひ、共通の目的を有つに至るのである。而し

て吾人が國民と呼ぶ所の者は、斯くして出で來たつた種々の團體に過ぎない。而して是等の團體に依りて劃限されたる個人が、己れの團體外にある個人と益々離隔すると同時に、己れの團體内にある個人と益々共同するに隨つて、己れの團體外にある個人と益々相違し、己れの團體内にある個人と益々一致するに至ることと言ふまでもないことである。斯くして一つの國民なるものは、共通なる言語を用ひ、共通なる宗教を信じ、共通なる道徳を守るに至るのである。

併し、翻つて何故に一つの國民が共通の言語を用ひ、共通の宗教を信じ、共通の道徳を行ふかと尋ねれば、其れは此の國民を形作る個人が、おのゝ其の生活を持続し、其の慾望を充足して行くのに、斯かる方便を必要とするからに過ぎない。詮り此の國民を形作る各個人の生活の持續と、其の慾望の充足とは、彼れが置かれたる地理や、氣候や、天候やに依つて劃限せられ、感化

せらるゝが爲めに、自然に斯かる言語、斯かる宗教、斯かる道徳を必要として來るのである。されば自分は國民性の存在を決して否定はしないが同時に國民性の據つて立つ根柢は個人性なることを斷言する者である。斯く國民性なるものの起原と意義とを説明した後、自分は國民性が如何に存続し、如何に發展するかを考察して見たいと思ふ。

天上、天下を通じて、此の世の中には唯だ一つの實在より他にはない。活動又は作用が即ち是れである。さればワイマアの詩聖が、作用は存在であると云つたのは此の事實を道破したものである。併し總ての作用は俗人より往々二つの存在と誤解さるゝところの二つの側面の交渉又は確執より成り立つて居る。是等兩側面の一つは周圍であつて、他は有機體である。俗人は周圍と有機體とを全然獨立したる存在と誤解するが故に、孰れも固定の性質を有つて居るやうに考へて居るが、事實は反つて其の然らざるこ

とを教へる。周圍が如何なるものであるかは、有機體の性質に依つて定められ、有機體が如何なるものであるかは、周圍の性質に依つて定めらるゝ。さればある特定の有機體を標準とする場合には、周圍が如何なるものであるかを假定することも出来るし、又ある特定の周圍を標準とする場合には、有機體が如何なるものであるかを假定することも出来るが、併し初めより兩方を分離して、兩方がある一定の性質を有つやうに考へるのは全く誤謬である。若し馬の活動と牛の活動とが異なるならば、其等の活動の一側面なる馬の有機體が牛の有機體と異なる如く、馬の周圍も牛の周圍と異なつて居るのである。今東京に住む各個人が盡く其の知識に於て、其の情操に於て、其の目的に於て、一人として全く同じな者がなければ、其の限りに於て、各個人に對して存在する東京は盡く異なつたものでなければならぬ。各個人に取つて唯だ一つの東京があるやうに言ふのは、相違を暫く不問に

付することを便利とする或る目的に依つて爲された抽象に過ぎない。

是れと同様に、周囲を基礎として出立すると、物質的には同一の有機體であつても、周囲の異なるに随つて有機體も亦異なつて來ると云ふこととなる。喩へば、ある一人の人が異なる刺激を與ふる、異なる周囲に取次に生活して行くと見ると、彼れが異なる周囲に於て、其れより來る刺激に適應するが爲めには、有機體は其れだけ變らねばならぬ筈である。其れ故に同じ人であつても、彼れが東京にある時と、北京にある時と、モスコオにある時と、ロンドンにある時と、ニュウヨウクにある時と、彼れが異なる刺激に對して異なる反應を爲さなければならぬ限りに於いて、彼れは異なる人である。云はねばならぬ。勿論有機體は統一する側面であつて、周囲は統一さるゝ側面であるから、一つの周囲は、異なる有機體に依つて異なる周囲と爲さるだけ、一つの有機體は異なる周囲に依つて異なる有機體とは爲されない

ことは云ふまでもない。

何故に有機體は刺激を選択し、統一して、自己に獨特にして、適切なる周囲を作るかと謂はゞ、其れは自己の生存を持續し、自己の慾望を充足したいが爲めである。而してある特定の性質を有する有機體は、ある特定の方法に、其れが受ける刺激を選択し、醇化し、統一することに依つてのみ、自己の存在と、發展とを保障し得るのである。

今國民は己れの生存と、發展とを唯一の目的として居る個人の團體である。されば國民の作用、又は活動は國民に取つて唯一の實在であるが、其れは必然に有機體と、周囲との二側面の交渉を假定する。而して此の場合に於ては、通例國民性が有機體を代表し、社會勢が周囲を代表する。されば、ある特定の國民性は、其の特性に随つて、日夜其れが取圍まれて居る社會勢を選択し、醇化し、統一して、其れを自己に獨特にして、適切なる周囲と化して居

ることは云ふまでもない。是れが即ち其の國民の文明と云ふものである。一體文明と云ふものに就いては、一般に行はれて居る誤解がある。文明は往々過去の活動の結果であつて、靜的のもものと考へられて居るが、其の實は現存の努力の進行であつて、動的のものである。或る國民の文明は、其の國民が有する性格に依つて、其れが圍まるゝ刺激を統一して居る様式に過ぎない。而して何物が國民をして其のやうな手數を取らしむるか、と云ふに、其れは言ふまでもなく、唯だ生活を持続し、慾望を充足して行きたいと云ふ其の國民の根本意志である。

生活を持続すると云ふことには、二つの階段があるやうに見える。其れは過去より受けたものを繼續することと、其れを擴張することとであるが、併し一層深く吾人にして事實の真相を窺ふときは、其處には唯だ一つの階段しか無いのである。國民の有する性格も、亦其れが置かれた周圍も、暫く

も固定したものに非ずして、絶えず動搖して居るものであるから、兩者の融合に依つて始めて存在し得る國民の活動は、絶えず變化せねばならぬ筈である。其れ故に生活を繼續すると云ふことは、同時に其れを擴張すると云ふことになるのである。されば嚴密の意義に於ては、如何なる國民と雖も、少しも擴張せずして生活を繼續して居る者はないのである。

ある國民に來る刺激には、其の性質から見て、比較的必然のものもあるし、又比較的偶然のものもあるやうに見える。換言すれば大部分其の國民の過去の活動に依つて作出された所の刺激もあるし、又其の過去の活動は殆ど與る所なく、俄に世界の他の方面より來る所の刺激もある。人類全體は昔より一つの完全なる有機體を形作つて居つたのであるから、其の一部分に來る變化は、縦令皮相には外から來たやうに見える場合があつても、其の實は人類全體の進行中に起る一つの出來事である以上は、其れを受け

る部分も亦其れを發生して居るのであると云ふ一種の見解は別として、兎に角實際の事實に立ちて關係の見地より論議する吾人よりすれば、確かに國民に來る刺激には比較的に偶然のもの、比較的に必然のものとのあることは到底看過することを許さない。されば比較的に偶然性を含める刺激に對しては、若し其の刺激が全く來なかつたならば、國民は實際取つた方針よりも違ふ方針を取つたらうと云ふことも云ひ得るのである。併し一度び其の刺激が來たるや、否や、國民は其の興味と實力とに依つて、其の抵抗に打勝たなければ己れの生活を持続することが出來ないものであるから、國民は忽ち其の上に選擇と、醇化と、統一との努力を施して、之れを己れの周圍として了ふのである。されば如何なる刺激も國民の意識に上るや否や、最早や内的、外的の區別もなく、必然、偶然の相違もないのである。例へば、我が國民が最近に出逢つた刺激に就て觀察しても、幕府の末期に於て、其處に

は内より發生した刺激と并んで、外より到來した刺激があつたのである。封建の制度とか、儒教の傾向とか、國學の勃興とか云ふやうなものより來つた刺激と、蕃學の東漸とか、露艦の出沒とか、米使の來航とか云ふものより起つた刺激とがあつたのである。併しどちらも國民の生活の進路に横はる問題であつて、國民は之れが解決の道を講じなければならぬと考へた時には、最早や何れが外、何れが内と區別を立てることは無意味のものとなつたのである。而して何れの種類の刺激に對するも、解決の方法は唯だ一つであつて、其れは己れの實力に依つて、最も善く己れの生活を持続することを計ることを標準として作られたのである。

勿論ある國民がある時期に於て、外來の文明に接觸すると、せざるに依つて、其れに固有の文明に相違を來たすことのあることは云ふまでもない。併し乍ら吾人が須臾も忘れてはならぬことは、其の變化の多寡と、形式とを

決定するものは、何時でも其の生存と、發展とを唯一の目的とする國民の性格であると云ふことである。

世には道理と事實とを誤解し、或は曲解して、而して、ある計畫を實現しようとして居る者が甚だ多い。今日一般に行はれて居る東西文明の融合の計畫の如きも、全く斯かる人々の混濁せる心より來たつた空虚なる計畫に過ぎない。是等の人々は二種の文明が接觸する時に、其れを融合すること、を可能たらしむる所の必要條件たる、能者の要求と、實力とを全然無視して居るものである。其れ故に、世界の大勢に鑑みて、東西の文明の接觸は今日より以後地球上到る處に生起すべき事實であることを知るや否や、彼等は日本が其の要求に應じ、其の實力に制せられて、之れが融合を計ると、其の結果は忽ち苟も東西文明の相會する場處には、支那にも、露西亞にも、英國にも、將た佛蘭西にも、其の儘、共通貨幣の如く用ゐらるべきものであると云ふや

うな迷信を有つて來るのである。東西文明の接觸は今後世界を通じての一大事實であるにしても、前に述べたやうに、之れを成就する國民は、皆な己れの生存と、發展との必要に迫られて、己れの固有の實力を以て爲し遂げるのであるから、支那の企てる東西文明の融合は支那に特有のものであり、露西亞の企てる東西文明の融合は露西亞に特有のものであり、佛蘭西の企つるもの、又英吉利の企つるものは、佛蘭西に特有のものであり、又英吉利に特有のものであらねばならないと自分はいふのである。勿論凡ての國民が類似の性情を有ち、類似の目的を有つて居る以上は、一つの國民に依つて成された東西文明の融合が、他の國民に取つて参考となると云ふことは云ふまでもない。併し前者の東西文明の融合を移して、直ちに後者の東西文明の融合とすることは決して出來ない。何れの國民にしても、外國の文明が到來した時に、如何ほど、如何なる部分を、如何なる風に、其れを取らうかと云

ふことは、獨り其の國民の性情と目的とよりのみ定めらるべきものである。東西の文明は、東洋に於けると等しく、西洋に於ても接觸して居ることは事實である。併し東洋が西洋の文明を攝取した如くに多く、西洋が東洋の文明を攝取しないのは何う云ふ譯であるか。是れは深く探索するまでもなく、東洋が西洋の文明の攝取を其の生存と發達とに必要とする如く、西洋は其の生存と發達との爲めに左程東洋の文明を攝取することを必要とせざるが爲めである。成るほど印度の哲學が獨逸の哲學に多少の影響を與へたと云ふ事實はある。日本の繪畫が佛蘭西の繪畫に多少の影響を與へたと云ふ事實はある。日本の武士道が西洋の道徳に多少の影響を與へると云ふことも或はあらう。併しながら、西洋の諸國が是等のものを攝取する多寡と、方法と、目的とを稽ふるに、是等を決定する最後の尺度は、彼等の生活の持續と發展とを唯一の目的として居る所の彼等の活動に他ならぬこ

とを吾人は知るのである。日本に於ても、美術に於て、道徳に於て、學問に於て東西文明の融合は爲されて居る。西洋に於ても、美術に於て、道徳に於て、學問に於て、東西文明の融合は爲されて居る。併しながら、其の結果に就いて見れば、全く似付かぬものとなつて居るのは、詮り兩者の統覺が異なるに隨つて、兩者の要求も異なるからである。なほ一步進んで西洋の諸國に就いて觀察するに、其れが己れの生存と發達とを保障するが爲めに、東洋の文明を攝取するに當つても、其れがおのゝ異なる統覺を有てるが爲めにおのおの異なる要求を感ずるとしたならば、其れが實現する東西文明の融合はおのおの異なるらねばならぬ筈である。英吉利は英吉利で、其の統覺を以て其の必要に應じて東西文明の融合を實にし、佛蘭西は佛蘭西で、其の統覺を以て其の必要に應じて東西文明の融合を實にし、獨逸は獨逸で、其の統覺を以て、其の必要に應じて東西文明の融合を實にして居るのであるから、其

の結果は、精細に吟味すれば、おのゝ獨特のものであらねばならぬ。前にも述べた通り、我が國は必要上西洋が我が國の文明を攝取するよりも、多く西洋の文明を攝取して居る。併し我が國も素より三千年の修養と發達とを有する大邦である。固有の文明は新來の文明を反撥せざるまでも、なほ明らさまに、在來の體系を保存しようとするのは、極めて自然のことであつて、又至當のことである。我が國は其の生存と發達との必要上、是非新來の文明と、固有の文明とを融合せねばならぬ。此の場合に若し固有の文明が實際あるよりも一層優勢なるものであるならば、新來の文明を攝取することは極めて少しで足りるのであるから、忽ち固有の文明に吸収されて了ふのであらう。又若し固有の文明が實際あるよりも一層薄弱なものであるならば、新來の文明で破壊されるから、殘る僅かものは、忽ち新來の文明に依つて併吞されて了ふのであらう。是等の孰れの場合に於ても、東洋の

文明と、西洋の文明との間には、何等の確執なく、何等の商量なく、二者は忽ち抱和して唯だ一つの文明しか現れないのであるが、事實として、固有の文明は今假定したほど優勢でも無いと同時に、薄弱でも無いから、こゝに我が國に於ては不思議な傾向が現れて居る。其れは他でもない。等しく東西文明の融合を目的として居るのではあるが、一つは西洋の文明を根柢として之れを日本化して居ることであるし、もう一つは日本の文明を根柢として、之れを西洋化して居ることである。

尤も斯くの如きは、いづれの國にしても、苟も文明と名づけられ得る程の獨特の文明を有して居つた國が、世界の氣勢に迫られて、外國の文明に接觸し、其れを攝取しなければならなかつた時に於ては、等しく實驗した出來事に過ぎない。たゞ刻下我國で實驗して居るものは、融合さるゝ二つの文明が、其の性質に於て非常に相違して居るのと、其の孰れもが其の特色に隨つ

て優劣なく非常に進歩して居ることから、前代未聞の外観を呈して居るのである。これに類した出来事は希臘の文明と羅馬の文明とが接觸した時にも起つたに相違ない。羅馬の文明とアングロサクソンの文明とが接觸した時にも起つたに相違ない。遠く實例を海外に索むるまでもなく、我邦の上古に於て、三韓の文明と我邦の文明とが接觸した時にも起つたに相違なく。

一方は西洋の文明を根柢として之れを日本化し居るといひ、他方は日本の文明を根柢として之れを西洋化して居るといふと、その間に有機的關係が缺けて居るやうにも想はるゝのであるが、事實は決してさうではない。兩者を支配する動機と、目的とは單一のものであつて、日本人は其の存続と、發展との爲めに、彼れの實力を以て當面の境遇に適應することを努めて居るだけである。されば是等二種の努力が形式に於て一致するとせざると

は極めて小問題であつて、たとひ外形に於ては、未來永劫是等の二運動は合體するの期なしとも、其の作用に於ては、已に有機的に協同して居るのであつて、孰れも日本人の存続と、發展とに貢獻して居るのである。されば是等の二運動を反抗と觀じ、衝突と觀ずるのは全く俗人の俗見に過ぎぬ。識者は夙に是等の二運動を調和と看、協同と見て居るのである。

自分は今是等二種の努力の適例を藝術と、宗教との傾向に於て見るのである。一口に言ふと日本の繪畫はクラシック或は其の變形であつて、西洋の繪畫はロオマンチック或は其の變形である。クラシックの精神に依つて立つ繪畫は様式の調和に重きを置き、ロオマンチックの精神に依つて立つ繪畫は内容の發動に重きを置く。而して様式の調和は線に依つて最もよく劃かれ、内容の發動は色彩に依つて最もよく描かれる。日本のはクラシックであるが爲めにクラシックの主とする様式の調和を發揮するに最も

便利なる線の方法に依つて發達し、西洋のはロオマンチックで内容の發達を主とするが故に、此の目的を達するに最も便利なる色彩の方法に依つて發達したのである。されば今兩方のものの優劣を判ずることは困難であるのみならず、又た無意味である。併し自分が茲に世人の注意を惹き起さうと欲する事實は、日本が西洋の文化に接觸して以來、日本の美術の精神と形體とに少からざる變化を來たしたことである。是れまで線を主なる方便としてゐた我が國の繪畫が、漸く線の價値に疑を挾んで來て、今は色彩と同格のものとし、或は色彩を線よりも優等の方便と見るに至つたことである。此の傾向は今日實際に行はるゝ二つの徴候に見ることが出来る。今日の畫家には日本の畫風を襲ふて現代の美術思想を表さうと務めて居る者と、西洋の畫風を襲ふて現代の美術思想を表さうとして居る者がある。

我が國に於て繪畫の方便に依つて現代の美術思想を表現しようとして居る畫家が、悉く在來のクラシックの精神及び形體のみに満足せずして、之れを新來のロオマンチックの精神と形體とを以て改整しようとして居ることは事實であるが、實際に之れが方法を講じて居るものの中に二つの流派がある。一つは我が國の過去の文明に依つて涵養された根柢の上に立ち、而して之れを現代の要求に應ずるやうに漸次に變形して行かうとするものであつても、一つは西洋の文化に依つて養成された體系を扶植して之れを次第に我が國狀に合するやうに醇化して行かうとするものである。前者はクラッシズムをロオマンチックに化さうとして居るものであつて、後者はロオマンチズムをクラシックと化さうとして居るものである。勿論事實に於ては日本畫が西洋の空氣に接觸して以來、色彩を重んずるに至つた傾向が顯著である程、西洋畫が日本の國土に移植せられて以來、

線を尙ふやうになつたことは顯著ではないが、併し兩者とも日本人として日本人の爲めに現代及び將來の美術思想を體現しようと努力して居るならば、兩者には必然に斯かる傾向のなければならぬことを斷言する。將來に於て日本國民が固有の特性を持続するが爲めに、悉く西洋の刺激を排斥し得ざる限り、又は西洋の感化に順應するが爲めに固有の性情を没却せざる限り、固有の理想を基礎とするも、新來の理想を根柢とするも、其の目的に至つては同一でなければならぬ。其れが受ける刺激と、其れが置かるゝ境遇との如何に係らず、其れを攝取し、其れに順應して、我が國民の持續と、發展とを計ることが即ち是れである。

今基督教と佛教との教理の根柢に如何なる相違が横はるかを吟味する邊はないが、確かに現今西洋に行はるゝ宗教と、我邦に行はるゝ宗教との相違は、一方は個性的であるに反して、他方は普遍的であると云ふことがいへ

る。而して佛教が西洋の刺激に觸れ、基督教が日本の境遇に移された時に、是れ等の宗教は各如何なる變化を今經過しつゝあるかを観ることは興味あることである。

普遍を主とする佛教も、個性を尊ぶ耶蘇教も、體系としては共に多くの神話と魔法とを含むに關らず、なほ其の唯一の目的は等しく生活を統一する機關であつたことは明かであるから、耶蘇教が如何に個性を尊ぶも、其の中には普遍は自から含まれ、佛教が如何に普遍を主とするも、個性は自から其の中に含まれて居つて、是等の二つの宗教の相違は、文字の上に現れて居るほど甚しきものではない。生活と云へば唯だ社會を形作る個人に依つて實現さるゝもの、他にある筈はない。されば何人と雖も其の生活を幸福にする爲めには、一方には社會の輔翼に信賴し、他方には自己の努力を發勵する外に道はないのである。而して基督教と佛教とは其れが産出し、經由

せし時代と、境遇との特質に随つて、一方は生活に必要な社會に信頼する方面を力説し、一方は自己の努力を發勵する方面を力説したのであるから、親切に理解すれば、基督教は個性を説きながら自から普遍を説き、佛教は普遍を説きながら自から個性を説いて居るのであるが、事實に照らして、其の精神を理解しようとせず、經典に拘りて其の文字を訓話しようとする僧侶や、信者やは佛教が普遍を教へるが爲めに個性を斥けるものと考へ、又基督教が個性を主張するが爲めに普遍を排するものと考へたのである。されば佛教と、基督教とは其の精神と目的とに於ては一致する所は極めて多いのであるが、併し其の外形と方便とに至つては異なる所が少くはない。東西の文明が接觸した日本に於て、普遍を主とする佛教が、個性を併せて重んずるやうになり、個性を重んずる基督教が、普遍をも考慮の上に加へて來たことは極めて自然のことである。自分は茲で將來兩者の何れが榮え、

何れが衰へるのであるか、又は兩者は全然合體するものであるかを豫言する義務は無い。唯だ我が國に於て佛教が其の生命を持続する爲めに基督教を斟酌し、基督教が其の根據を作らんが爲めに佛教を参照するのは、全く我が國民が其の生活を持続し、發展するが爲めに、斯かる傾向を取つて居るのであると云ふことを明かにすれば其れで十分である。

上に今日我が國に於て美術と宗教とが取りつゝある状態、趨りつゝある傾向を述べたのは、實際に於て、あらゆる活動に於て行はるゝ、また行はれざるべからざる東西文明の融合の必須の形式として示したのに過ぎぬ。此の他政治と雖も、工業と雖も、道徳と雖も、學術と雖も、苟も今日我が國民の機關となつて居るものの中に、東西文明の融合は悉く行はれて居らなければならぬ筈であるし、又其れが行はるゝには、必ず美術と宗教とに於て行はれて居る方法に依らなければならぬ筈である。詮り其の標準なるもの

は極めて簡單なるものであつて、我が國民が置かれた境遇に於て、其の生活を持續し、發展するが爲めに、時々刻々襲ひ來る刺激を支配しようとする努力が即ち其の最終の標準である。

されば東西文明の融合と言つた所が、事新しく言ふ程獨特の性質を有する事實ではない。ある國民が其の生活を持續し、發展する場合には何時でも用ゐられて居る方法に依つて實現されるものであつて、又た其の他の方法に依つては決して實現され得ざるものである。

吾人は吾人の置かれたる特殊の境遇に於て、生活を持續する必要に迫られて、東西文明の融合を圖つて居るものである。吾人の置かれたる境遇に於て生活を持續することは、獨り東西文明の融合を實にすることに依つてのみ得らるゝのであるから、若し吾人にして當面の境遇に於て吾人の生活を持續しようとする努力するならば、其の結果は必然に東西文明の融合となつ

て現るゝのである。この他にこの上に、特に東西文明の融合を企てるやうなことをするならば、そのやうな東西文明の融合は到底如何なる様式に於ても實現されるものでないことを自分はこゝに斷言する。總じて如何に高遠と見られ、博大と思はるゝ主義や、理想やでも日常生活を持續し、發展する要具として企劃され、運用せらるゝものでなければ悉く空想である、情思である、虚偽である。

事實にして斯くの如く、又た斯くの如きに過ぎずとせば、東西文明の融合は何人に依つても容易に爲され、何人に依つても必然に爲されなければならぬ事實である。現今我が國は生活の如何なる部分でも、直接に、又は間接に、外來の刺激に依つて浸染せられて居るならば、其の中に在つて、生活を持續し、發展するものは、其儘で盡く東西文明の融合を圖つて居るものである。幸福なる生活を實現するに必要な形式は、嘗てエドモンド・バークが觀

察した通り、過去の歴史の統一を失はずして、現在の境遇を支配することであるに相違ない。併し之れは唯だ大體に謂はるべきことであつて、ある特殊の國民がある特殊の境遇に置かれて、如何ほど過去の歴史の統一を計り、如何ほど現在の境遇の支配を努めねばならぬかと云ふことは、獨り其の國民の聰明が発見する必要に依つてのみ定めらるゝものである。而して此の必要は、若し其れが正當に発見されて居るならば、歴史の統一と、境遇の支配とは自から實現されて居るのである。東西文明の融合も、之れを理論的に解釋すれば、我が國固有の性情を失はずして外來の刺激を支配することとなるが、實際に於ては、各人が其の聰明に依つて発見した必要に従つて身を處することとなるのである。

之れを要するに、東西文明の融合は獨り各個人の努力に依つて實現されるものであつて、各個人は彼れが執る業務と、彼れが置かれたる境遇とにしがたがつて、生活の持續と、發展とを圖るのが東西文明の融合を實現する唯一の方法である。之れを外にして、此れと云ひ、彼れと云ふは、皆な事實に基かず、事實を鑑みざる書齋の空論である。

自由思想家の倫理觀

一、自由思想とは何ぞや

私は一個の自由思想家を以て自から任じて居る者であるから、今日は自由思想家の倫理觀といふ題で、私の倫理觀を述べて見ようと思ふのである。本題に入る前に自由思想といふことに就て少しく説明する必要がある。自由思想といふ言葉は勿論私が初めて使ひ出した言葉ではなく、是れまで西洋に於て大分使はれて居る言葉である。又此の頃新聞で見ると我が國に於ても社會主義の人々は『自由思想』といふ表題で一つの雑誌を發行して居つたやうである。併し是れまで自由思想といふものが一般にどういふ

風に理解されて居つたかといふと、なんでも過去に作られた理想や、道徳や、制度を出来る丈け破壊した上、今日の状態では到底實現することの出来ない理想や、道徳や、制度を實現しようとするのが自由思想であるといふやうに解釋されて居つたのである。例へば露西亞の小説によく出て来る自由思想なるものは皆さういふ風である。若し自由思想といふものが之れ以外に出ないものならば、今日實際に人間が持つて居るやうな性情を持つて居る人間によつて經營せらるゝ社會が繼續する限り、自由思想なるものは空靈きはまる一片の感想に過ぎないといはなければならぬ。

かゝる意味に於て、デカアトの計畫は確かに自由思想によつて支配されたといつてよい。而して其の起點の大膽なるに似ず、其の歸結の如何に脆弱なるものであつたかは、嘗て一度歐洲の近世思想史を學んだものの悉く知つて居るところであらう。

諸君の知らるゝ如く、デカアトは過去に出来た理想や、道徳や、制度には悉く誤謬が含まれて居るから、自分が哲學の系統を立てるに當つては、知らず、識らず自分の生活に入り來つた一切の要素を排斥する。自分は今現に自分が生活するやうに生活するには、是非とも必然の現實として認容しなければならぬ意識の存在のみを認容するといつて、『我れ惟ふ故に我れあり』といふ、あの有名なる命題を根柢として、彼れの系統を築き上げようと試みたのであつた。併し彼れは内證の事實と號して、忽ちに人間が過去幾十世紀間、乃至幾百世紀間、彼れが固有せる性情を以て生活を持續する爲めに、彼れの經驗を統一するに便利な方法として創設し、改良し來つた世界、靈魂及び神等の存在と性質とを其まゝ取り入れながら、猶ほ彼れは一切社會の感化を排斥して、獨り自己の純粹意識の内、純粹思索の力によつて發見し得たるものと想像して居つたのであつた。併し今日吾人がデカアトの爲

たことをよく點檢するに、彼れは當時生活した他人と等しく、當時の社會を支配するに重大な意義を有つて居た神、世界、靈魂等の存在を認めたるのみならず、其等の性質に關しても、亦た他人とあまり異ならざる理解を持つて居つたのである。而して是れは勿論さうなければならぬ筈である。何故ならばデカアトといへども、等しく人間の子と生れて、人間の性情を以て己れの性情とし、人間の目的を以て己れの目的として居る上に、生活統一の機關としようとする志向を以て哲學を考究するからには、如何に彼れが口には過去に出來た一切の理想も、道德も、制度も排斥して、全く新しく一つの人生觀や處世法を立てるといつても、實は彼れが哲學の原料と、合せて其の方法さへも、當時の社會を支配せる信仰や、政治や、教化や、道德や、學術より採用する外はないのであつた。されば自己の思想の内證によつて、彼れの哲學の構造を暗示されたと彼れが語るときに、私は決して彼れの誠實を疑ふもの

ではないが、併し彼れが真空の中に活らいて居ると想つた思想の内證なるものは、無限に歴史的傾向と社會的感化との大氣の中に動かされて居つたのであつたのである。其れであるから、彼れの假定は一つの迷想によつて囚れて居つたのである。彼れが最も確實なる知識の特徴として擧げた『明瞭』及び『判別』も畢竟するに社會生活を維持して行くに必要な諸の社會活動が必然に具備しなければならぬ二つの特徴であつたのである。さういふ譯であるから、あらゆる哲學者の職分と同じくデカアトの職分も、當時の道德や、理想や、制度を一切排斥することにあらずして、其等のものを成るだけ廣く、深くとり入れた後、社會の進行につれて、自然に其等の中に生じ來たる矛盾と、軋轢とを調和し、融合するの一事に限られて居つたのであるといふことを、私はこゝに斷言しようと思ふのである。自由思想を主張すると稱してデカアトと同じ迷信に陥つたものは他にもあるが、其の結果から

見て、過去に出来た一切の理想や、道德や、制度を排斥して、全く新しく其等のものを建築せんとすることが自由思想ならば、私は自由思想は未來永劫失敗に終るべきものと思つて居る。

以上の理由で絶対的の自由思想を主張することには何の意味もあり得ないが、相對的の自由思想を主張するには大なる意味があると私は信じて居る。さらば相對的の自由思想とは如何なるものであるかと問はゞ、人間の唯一の目的は幸福なる生活を獲得するにあるのであるが、幸福なる生活は、彼れの持てる欲望の實現を圖るが爲めに、彼れのおかれた境遇を征服し、又彼れのおかれた境遇の整頓を計る爲めに、彼れの持てる欲望を訓練することによつて、即ち彼れの欲望と境遇との融合を謀ることによつてのみ得らるゝものである。併し、欲望と境遇とは共に絶えず變化するものであるから、兩者の間に融合を謀るの道も亦絶えず變遷しなければならぬ。此

處に於て生活の進行するおひだには、自から絶えず破綻を生じて居る。随つて最もよく生活の支持と發展とを料らうとするには、時に應じ、機に乗じて、既に頹廢せる古き理想や、道德や、制度を捨てて、方に要求せらるゝ新しき理想や、道德や、制度を作らなければならぬが、多くの人は保守に陥り、急進に走つて、中正を守るものが甚だ少いから、絶えず社會の真相を觀察して、あらゆる僻見に囚れず、何時でも現存の理想、道德、又は制度を如何なる程度まで保存し、如何なる程度まで改善すべきかといふことを全く當面の必要より決定して、他人が舊に拘泥して居る時でも其れを拋棄することが利益であるならば其れを拋棄することに勤める、又た他人が新に狂奔する時でも其れを抑制することが得策ならば其れを抑制することに勉める、理解と、鑑賞と、覺悟と、努力とが私の所謂相對的の自由思想といふものである。私はかゝる自由思想を以て現代に生活し、現代を批判し、現代を指導して行きた

いと思つて居るものであるから、自から自由思想家を以て任じて居るものである。今日は此の立場より目下我が國の社會のある方面に浮動して居る倫理思想の批評と訂正とを試みて見たいと思ふのである。

二、道德の本質

唯今、我が國に於て行はれて居る種々の倫理思想の誤謬を指摘するには、先づ其れが爲めに要する一つの明確なる標準がなければならぬから、私は先づ其の標準を敘述し、而して後其の標準に憑據して、種々の倫理觀の價値を判断しようと思ふ。而して此の標準なるものは人間の生活の性質を外にして別にある筈はない。もと道德なるものは人間が彼れの生活を持続するに特殊の道具を用ひて居ることから、自然に、又た必然に發展して來たものであるから、其の道具の特徴が如何なるものであるかが明かになつた

ならば、あらゆる倫理思想の價値は、其の結果を標準として、遺憾なく判断せられ得べきものと私は考へて居る。

もとより人間の道德は、彼れに固有する道具によりて生活を持続することを必要とする人間の性情から發展し來たつたものであつて、又あらゆる倫理説なるものは實際の道德を綜合し、統一し、醇化して出來たものであるから、如何なる倫理説といへども、其の根柢を全く人間の性情以外に置くものではなくして、必ず其の性情を形作る或る側面、又はある要素より其の假定をとることは明かであるが、併し凡ての種類、誤謬と等しく、倫理説の誤謬も亦た局部の機能を全體の活動と誤解し、又は一時の發現を永久の傾向と誤認するより來たつて居るのである。其れ故に、私は此處に根本的に人間の生活の方法を全體として觀察し、其の成果に憑りて多くの倫理説によつて作られた範疇の虚妄を赤裸々に指摘するの必要がある。

私が是れまでしばしば色々の研究の出立點として述べた點であるが、何故に下等動物は道德をもたずに生活し得るが、人間は其れに反して道德をもたなければ生活し得ないかといふに、其れは下等動物と人間とは生活の道具を異にして居るからである。下等動物は本能を以て重に生活の道具として居るが、人間は衝動を以て重に生活の道具として居る。然らば本能的衝動との作用の相違は如何にといふに、本能の方は生れる時に親から譲り受けたまゝで直ぐに役に立つやうに出來て居るが、衝動の方は其のまゝでは直ぐに役に立つやうには出來て居らぬのであつて、經驗によつて時々の場合に應ずるやうに變更せらるゝの必要がある。されば下等動物の行爲は賦與された事實であるが、人間の行爲は解決せらるべき問題である。

此處には殊に下等動物の行爲と、人間の行爲とを比較研究するのが目的ではないのであつて、只人間の生活を持続し行くに必要な道具の特徴を

劃出する便宜として、暫く其れを下等動物が其の生活を持続する道具の特徴に對比したまでであるから、是れよりは人間の行爲の性質だけに就いて、尙ほ少しく敘述を費すこととしよう。

下等動物の方は初めに賦與されたまゝで別に變更も要せず、また修正も要しない本能で持續されるのであるから、其の特色は單行的であつて、唯だ前の行動の影響が必然に後の行動を喚起すといふに過ぎない。併し人間の行爲になると、絶えず經驗によつて教育せられ、要求によつて改整せらるゝることを必要とする衝動によつて持續されるのであるから、行爲の目的は勿論單一ではあるが、其れが活らく様式になると暫く確執することによつて、同時に反抗し、同時に協同する所の二要素、又は二側面となつて現れる。

衝動の生起は素より人間がある特殊の境遇に居つて、其の生活を持続し、其れに依りて満足を獲得しようとする彼れの根本性の發動ではあるが、併し

衝動が境遇に適應する爲めには、必ずある變更、又は修正を受けることを必要なる條件として居るとすると、其處には、たとひ暫時にしても、支配する標準と支配せらるゝ対象との現れることは明かである。こゝに支配する標準として現るゝ側面は、普通理想と呼べるゝものであつて、支配せらるゝ対象として現るゝものは、普通嗜慾と呼べるゝものである。人間の行爲は如何なるものにて、其れが意識的であるものならば、必ず是等の二要素又は二側面の反抗及び協同の經過をとらなければならぬのである。人間はさうしないでも安全に生活が持続出来るのに、好んで餘計な手数をかけるが爲めに其んなことをして居るのではない。前云つた通り、人間は本能によらず、衝動によつて生活して居るといふ極めて單純なる事實の爲めにさうして居るのである。唯だ人間は此の様式によつて生活することの必要あるが爲めに、道徳を有し、法律を有し、宗教を有し、科學を有し、美術を有する

ことを必要とするのである。何故ならば是等のものは皆理想と嗜慾とを併して適當に協同せしむる方便として出來たものであるからである。併し人間の行爲の觀察に於て、吳々も忘れてはならないことは、其れを形造るに必要なる支配する方の理想と支配されるゝ方の嗜慾とは全然單一なる活動を構成する所の二重の機關に過ぎないといふことである。或る場合に、其れに適當するやうに行爲を變更し、又は修正して行かうとするには、どうしても標準と対象、又は理想と嗜慾といふやうに二重の形をとらなければならぬのであるといふことである。固より個人の意識に訴へて、少くも此の傾向の進行する間は、理想と嗜慾との間に確執、而かも時としては随分悲惨なる確執があるから、其等を全然混同する譯にはゆかぬ。併しながら、又是れを全然分離して、了ふと、人間の行爲の性質を理解することが出來なくなることも明かである。されば是等兩側面を如何に思考することが最も

正確に人間の性質を理解する道であるかと問はゞ、私は其れは唯だ作用的には識別するが、本質的には分離しないといふ一事に限られると思ふ。

人間は自己の生活を持続して行くといふことの他に、別に目的を有ち得るものではない。而して生活を持続することは、唯だ欲望を實現し行くことによつてのみ得らるゝのである。されば生活を持続するといふことと、欲望を實現するといふことは、殆ど同一事件を云ひ表す二つの成語と見て大した差支はない。人間が新しくある行爲をなさうとするには、是非とも其れに必要な理想と欲望とを調整しなければならぬのであつて、其れには努力を要する。場合によつて淺易なる努力しか要しないこともあるし、また場合によつて激甚なる努力を要することもあるが、畢竟するに、如何なる場合にも多少の努力は必要である。嗜慾は孤獨の立場よりなるだけ自由に己れを發動せんと主張し、理想はなるだけ全體の利害の立場より、其

れを拘束せんと主張して、こゝに兩者の主張の間に傾向の矛盾が生ずるのである。併しもし人間の行爲が何時でも理想と嗜慾との調和を以て成立つものならば、如何に一時は強烈に其の主張の性質を異にするものであつても、結局は必ず其等の調和を計らなければならぬ譯である。こゝに於て兩者の反抗を感ずると同時に、また兩者の調和せられざる可からざることを知る全人は、智的の方面に於て努力し、感情の方面に於て煩悶するのである。蓋し人間は努力又は煩悶によつてのみ、嗜慾に含まれたる新しき要素によつて理想の様式を開暢し、理想に含まれたる古き法則によつて嗜慾の過激を矯正して行くのであつて、こゝに始めて眞の意味に於ける自己實現は可能となるのである。

自己の實現といふことは、つまり個々の行爲に於て嗜慾と理想とがよく調和されて居る結果として、個々の嗜慾が發動する時には、何時でも其の分

量と様式とは全體の利害の立場より支配せられて居ることである。勿論どんな嗜慾をどんなに發現しても、其れはもと自己の發動であるから、其の限りに於て自己は實現されて居るに違ひない。併し人間は一つの慾望に生きずして、多くの慾望に生き、一時の慾望に生きずして、永久の慾望に生きて居るものであるから、もしある場合に於て、ある慾望を發現するに當つて、他の慾望の要請を壓迫したり、後に起る慾望の存在をして危殆ならしむるやうなことがあつては、彼れは大局の立場より却つて自己の實現を損害して居るものといはねばならぬ。たゞし、概していふと、人間は本來の性情によつて經驗と反省とを利用して、最もよく生活を持続し、慾望を發現し、隨つて最もよく自己を實現することの能力を持つて居るものである。

以上は人間が彼れの生活を持続するに用ゐる道具の特徴より、必然に彼れが生活の内容を作つて居る事實と私は信ずるものであるから、之れを標

準として、現今日本に行はるゝ諸種の倫理思想の價値を批判しようと思ふ。

三、從來の倫理思想の缺陷

從來東洋にも、西洋にも、倫理思想の系統といふものがあるが、何れも現今の人間の生活を批判し、統一するものとしては甚だ不適當なるものとなつて居る。何故さうなつて居るか、と吟味して見ると、其等の多くは皆其の精神に於て神話の系統を傳へて居るからである。

私は神話が全然虚偽の教訓であるといふのではない。過去に於て、人間がある様式の生活を必要として居つた時には、神話に基ける教訓が絶大の價値と權威とを持つて居つた時代のあつたことを承認する。併し、唯だ私は今日に於ては神話の系統を引ける倫理思想は、人間の幸福及び發展の爲めに無用であるのみならず、有害であると信じて居るものである。

今こゝで私は神話の特徴について詳しく述べる暇はないが、一口にいふと、神話は人間の行爲が必然に暫くとする二側面として、先きに私が述べた所の理想と、嗜慾とを常に分離するのみならず、其の間の反抗を絶對的にして又た永久的のものに見做したのである。此の結果として、理想の客観化されたる神と、私慾の客観化されたる人間とが生じ、而して神は常に人間を威壓し、人間は常に其れに畏服することによつて、始めて生活が整頓されるものであるとのみ考へたのである。神は何んでもかまはず人間を威壓しようとするものであり、人間は隙さへあれば神に反抗しようとするものであるが、併し兩者の權力の相違より、人間は神の意志に服従することになると見たのが神話の精神である。

勿論今日から見ると神話は確かに其れが顯れた時代の要求を最もよく満たして居つたといふことが出来る。嗜慾は兎角我儘なものであるから、

其れが十分に威力によつて訓練されないと、なか／＼生活全體の幸福を來たすやうに自己を發現することが出来ない。こゝに於て嗜慾の權利を尊重するよりも、先づ理想の威力を強大にして、嗜慾をして法律に従順であることを學ばしむる必要がある。素より理論としては、如何に生活に秩序が大切であつても、理想の權威と嗜慾の權利とを適當に融和して、其の間に秩序を確立して行くことが一番賢い道であつたと思はるゝが、實際に於てはさう行かなかつたのである。先づ理想の權威を強大にして秩序を確立した後、始めて其の制裁の中に嗜慾の權利を増長せしむることが唯一の方法であつたのである。

斯くして神話の精神は、社會の一切の活動を支配して、其の特徴をなして居つたのである。過去に出來たものは、宗教でも、政治でも、道德でも、悉く嗜慾と理想とを二元と見る神話から出て居らないものはない。宗教に於て

は神と人間となり、政治に於ては國家と個人となり、道德に於ては天理と人慾となつて現れて居るが、併し是等の區分の根柢に横はる概念はみな同一である。而しても、單一なる活動の二重の作用をかく分離するより來たる自然の弊害は二つである。其れは即ち理想と嗜慾との關係を誤解せる結果、活動全體の精力に大なる消耗を來たすことと、人間の能力に對する信用を減ずることとである。斯く道德の事實を見ることは、人間の幸福と發展とにとつて大なる損害であると思ふ。素よりウオタア・バジョットも協同を主とする討議の時代(Age of discussion)に先立つて、其れが必然の準備として、權威を主とする造民の時代(Age of nation-making)の必要を説いて居る通り、私は今日より見て、如何に不利益であつたと見えても、決して過去に於て神話が全然無用であつたといふのではない。唯だ私は今日になつて神話に優る生活統一の方法があることを知りながら、なほ單に聰明と勇氣とを

缺くが爲めに、徒に惰力によつて色々の形式を籍りて、神話の精神によつて生活を統一しようとして居る所の學者、教育家、爲政家の行爲を非難しようとするのである。何となれば、此の明治四十二年に於て、色々の人々によつて主張せられ、宣傳せられて居る反自己實現說、抽象理想主義、神祕主義、回顧主義、悲觀主義及び老婆政策は悉く神話の遺物であつて、今日我國に於て社會の發展を傷け、個人の權威を損するものは、かゝる不明の倫理思想より大なるものはないと信ずるからである。彼等は、どうしても、もう少し遠大の立場より人間を考察して、其の能力と善性とに一層の信用をおくことが出來ないのであらうか。ファウストの序言に、神と天使ガブリエルとの人間の能力に關する對話がある。ガブリエルは頻りに人間の墮落について不平を並べて、最早救濟の道はないから、急かに絶滅してしまふ方がよいといふ。神は之れを聽いて、人間はいくら過失に陥つても、其れより解脱する力

も亦た自から持つて居るから、暫く彼れの爲す所を見て居れと云はるゝ個條がある。世間の道徳を説くものにしてガブリエラたらざるものは殆どないやうであるが、私自身としては、厭くまでも人間の能力と善性とに信頼する神の意見に同意するものである。十分の信用を人間の能力と善性におかずして、どうして眞面目に人間に對つて道徳が説けるか。私には實に不思議でならないのである。今日道徳の教師のあるものが考へる如く、人間が彼れの本性より惡を好み、墮落に傾いて居るものならば、其れを改善しようとすることは矛盾の甚しきものではあるまいか。併し世間には其の矛盾を含める所爲をして居るのみならず、矛盾が大なれば大なる程、教化の事業に意義と權威とが増して來るといふやうな謬見を持つて居るものも多々ある。

四、反自己實現說に對する批判

第一に私が批判を試みたいと思ふのは、自己實現說に反對する人々の意見、即ち反自己實現說である。

近頃二三の學者及び教育家の中には自己實現說に反對するものがあるやうである。等しく反對するといつても、其の様式や、程度には相違があつて、自己の實現は一切惡いと論ずるものと、又た自己の實現も善いのと、惡いのとあるから、其の間に價値の相違を見認めなければならぬと論ずる者があるやうであるが、私は是等の何れもが道徳の事實を誤解して居る點に於ては同一であると思ふ。

道徳とは個人が彼れの生活を持続し行く工夫として生ずる事實である。生活を持続するには、どうしても慾望を發現しなければならぬ。而して自己なるものは慾望の發現によつて、始めて其の存在を得るのであるから、個の慾望の中には其れだけ自己は含まれて居る譯である。されば生活の

持續といふことと、慾望の發現といふことと、自己の實現といふこととは全然同一事實であつて、道德の事實の存在を生活の持續の必要なる條件とするならば、自己の實現がないならば、道德の事實も存在せざることとは明かである。されば自己の實現が道德の生活に有害であるなどといふ論者は、道德の生活とか、自己の實現とかいふことを語りながら、自から其等の意味を全然理解しない所の儕である。彼等は自己を一切壓殺して、而して後如何なる行爲が残ると思ふのであるか。社會に存する道德の體系は、其れを構成する各個人が、自己を實現しようとする努力の結果に他ならないでは無いか。彼等が自己實現を非難する如きは、道德其の物の基本を全然破却するものである。勉めて道德の可能を排斥して、而して道德の事實を得ようとするのは、矛盾の甚しきものである。

論理的に事實を追窮すると、勿論上にいつた通りになるが、論者は多分是

れまで無我とか、没我とか唱へた宗教家や、道德家の如く、漠然人間の性情の中には、不思議にも善に向ふ天理と、惡に向ふ人慾とが相争ひながら并行して居るのである。道德上の努力は、なるだけ天理をして人慾に勝たしむるにあるといふ風に考へて、等しく個人の中の精神の中にはあるが、天理は自己以上のものであつて、唯だ人慾のみが自己であると考へたのであらう。しかし是れはまた事實に照らして大なる誤謬である。人間には、初めより天理とか、人慾とか、互に反抗する原則はないのであつて、たゞ自己の性質を分受する個々の慾望のみであるのであるが、過去の經驗によつて適當にある慾望を發現した時には、自己は是れを稱讚して天理に適つた行爲となし、不當にある行爲が實現された場合には、自己は之れを擯斥して、人慾に陥つた行爲と見るだけである。自己は何れの行動にも現れて居るのであるが、適當に自己が現れた時には、之れを天理と呼び、不當に現れた時は、之れを人慾と

呼ぶのである。されば天理と人慾とに於て、何れが最も自己が現れて居るかといへば、其れは天理の方にあることは勿論であるが、併し人をしてなるだけ天理に適ふやうな行爲をとらしむる道は、唯だ経験を豊富にし、反省を強烈にして、出来るだけ自己を實現するの他はないと思ふ。

等しく自己實現に反對しながら、他の見解をとる論者は、心理上よりいへば、人間の行爲は悉く自己の實現であることはいふまでもないが、其の中には道德を益する行爲と、害する行爲との二種あるから、其等を區別する爲めに、ある標準を設くる必要がある。悪人の行爲も自己の實現であるが、善人の行爲も亦た自己の實現である。併し社会的に見れば、是等兩者の行爲は非常に其の價值を異にする。其れ故に行爲の價值を判断する爲めには、超個人的即ち社会的の標準が必要であるといつて、自己實現説の倫理説としての價值を疑ふのである。是れは如何にも一應尤もな意見であると思ふ。

併し人間の行爲に關して、個人的價值と社会的價值とを對照せしむるに至つては、論者も亦た明かに人間の行爲の性質を十分に考覈したことのないものといはねばならぬ。

私が論者の此の意見を認容することの出来ないのには二つの理由がある。一つは假りに善惡に關して個人の標準と、社會の標準とは別であるとしても、社會の標準は、其れが個人の標準とならざる間は、如何なる行爲となつても現れないといふことであり、一つは、なほ一層深く吟味すると、社會の標準なるものは其の根柢を個人の標準にとらないものはないといふことである。今此の第二の點より議論を進むることとしよう。

社會の標準といつても、つまるところは、其の社會を作る個人が各自己の標準を基礎として合議の上作つた所の標準である。個人は各自分の幸福を増長することを目的として居るが、稍もすれば其れが他人の幸福を損害

することとなる。こゝに於て自己と他人とが、なるだけ多くの幸福を分受するが爲めに、ある程度までは自己の権利を制限し、他人の権利を尊重することが、却つて各自の幸福を保障するの道であることを悟つて来る。さうなつて來ると、各個人が社會の一員として社會生活を送る間は、彼れの道德の標準なごものは自から彼れが居る社會に於て實現さるゝもので無ければならないから、自然に社會の標準なるものを反照し、個人の道德の標準と、社會の道德の標準とは、全く區別すべからざるものになつて居る。空想として彼れは如何なる行爲でも懷抱し得る。併し眞面目に實現しようとする、彼れが計畫する行爲の多くは、自から社會によつて是認せらるゝものに限らるゝのである。されば彼れがある行爲を思ひ浮べると同時に、彼れは社會が果して其れを是認するかどうかといふことを考慮するのである。否、過去の經驗によつて、社會が是認した行爲の他は、多くの場合に於て彼れ

は實現しようとして初めより企てないのである。かくして各個人が永遠の立場より最も完全に自己を實現する行爲は、最も切實に社會に適合する行爲であるといふことを知るに至るのである。其れ故に抽象的でなく、具體的に個人をとる時は、彼れの標準と社會の標準とは、大抵の場合に於て、一致するものと見なければならぬ。實に個人が相集まつて社會生活を經營し、其れによつて各個人は一層よく自己を實現して居る事實に照らして見ても、以上の事實は現存のものとして假定せられねばならぬと思ふ。

勿論一時の嗜慾の満足を計るが爲めに他の慾望の系統を破壊して顧みざるものがあると同一やうに、抽象的の自我の利益の爲めに、具體的の自我の利害を犠牲にするものもあるが、併し其れは何れの場合に於ても一時の發作であつて永久の傾向ではない。されば自己實現といふことを最も廣き、最深き意味に解釋するならば、其れは決して社會の道德と矛盾するもの

とはいはれないと思ふ。

第一の點に移るが、假りに善惡に關して、個人の標準と、社會の標準とが、ある場合に於て異なるとしても、社會の標準によつて、個人の標準を矯正することを教育の目的と考へて居る論者は、少くもさうする可能性を其の間に認めて居るからであらう。併し兩者の間に、共通性、或は同一性を認めないで、どうして可能性を認めることが出来るか。内に先づ萌芽があれば、其れを外より開發することは出来る。併し内に何んにもない處へ、外よりあるものを注入することは決して出来ない。教育や、刑罰は彼れに潜在せる素質を助長する媒介とはならう。併し決して素質其のものを賦與することは出来ない。して見ると、若し個人の標準と社會の標準とが矛盾するやうなことがあるならば、其れはたゞ自己が十分に實現せられて居らないからであつて、兩者が一致するに及んで、初めて自己實現の功が成つたものと見

るのが適當であらう。先には自己は抽象的に、部分的にのみ實現されて居つたのであつて、後に始めて其れが具體的に、全體的に實現されるやうになるのである。

以上の理由で、自己實現說に反對する是等二種の論者の何れもより來たる反對は、全く道德の事實を理解しないより來たつて居るのであつて、共に道德の活動を薄弱ならしむる結果を致すものと私は信ずる。

五、抽象理想主義に對する批判

第二に私が批評しなければならないのは、抽象理想主義である。是れも甚だ道德の事實を誤解した見解ではあるが、不幸にして廣く我が國の學徒によつて宣傳されて居る所のものである。素より私は前にも述べた通り、理想なるものは嗜慾と相俟つて生活を形造る重大なる要素であつて、生活

其のもの、繼續であり、發展であるから、ある學說が、生活の一側面たる理想の存在を認識し、其れによつて生活を理解し、統一しようとすることは極めて至當のことであると信ずるものである。されば、私は決してある方法に於て、生活の中に理想の勢力を認識しようとするあらゆる理想主義に反對するものではない。私も矢張生活の中に理想の存在を認識し、また其の發展を助長することを以て完全なる倫理學說の必ず職としなければならぬところのものとして居るのであるから、私も亦た理想主義を自家の學說として居るのである。併し私のは具體理想主義とも名づけられるべきものであつて、等しく理想の價值を認めながら、其れと生活との關係を見るに至つては、抽象理想主義と全然反對の態度に立つものである。私は理想が吾の日常生活に於て、個々の行爲を決定する要素とならないならば、何の意味もないものである。されば理想は個々の行爲の外に、其の存在も、役目も有

つことの出来ないものと信ずるのであるが、併し抽象理想主義の主張者は理想を個々の行爲の外にあるものと信ずるのみならず、其の間の距離が遠ければ遠い程、理想の權威を増すものと信じて居るのである。彼等といへども、其んな理想が生活に對して意味あるものと理解して居る以上は、もとより個々の行爲と何等かの關係がないとは考へては居らぬ。併しながら其の役目はたゞ吾人が其の方に向つて進む目標たるに過ぎないのである。個々の行爲を決定する方針は別にあるが、併し理想は其れ以上に吾人に向つて人生の到着點を教へるといふのである。此の學說は素より今日日本の學者が始めて發見したものでなければ、また始めて製造したものでもないので、随分昔から東洋にも西洋にも廣く行れたものであつて、つまり神話時代の遺物に過ぎない。其れで此の抽象理想主義も其れが案出された當時に於ては、確かにある効用があつたと見るのが至當であらうが、今日に

於ては、此の學說を必要とする状態は社會より去つて了つたのである。然るに此の學說を傳習的に信奉する彼等學徒は、獨自の力によつて現代の要求を看取するの聰明なく、また舊時の學說を改造するの勇氣もないところから、學說の價值も、時代の特徴も顧みずして、唯だ盲目的に抽象理想說の効能を述べ立て、居るのである。彼等の遲鈍なる感性には自然主義者の冷言熱罵も一向にこたへがないと見える。

西洋にあつては、プレトオ、ストア學徒及び基督教父等は皆抽象理想主義者であつた。たゞ現今の抽象理想主義者の舊式の抽象理想主義者と異なる點は前者が理想を過去においたのに反して、後者は是れを未來におくだけの相違に過ぎない。理想を現在の状態にては實現し居らず、又は實現せらるゝことの出来ない固定の形式として居ることに於ては、前者、後者、全然同様である。されば現今の抽象理想主義者は言葉の上だけでは、現在の生

活が発展する曉は何時か其處に到達するといつても、其の可能性の指標さへ必然見出すことは難かしいやうに理想の性質を理解して居る以上は、理窟に於ては矢張プレトオの如く現在の生活は現象界にあり、理想は獨り本體界にあるとして居るのである。今日の抽象理想主義者がプレトオの學說の非實的なるを冷笑しながら、自家の學說の其れに比して等しく非實的なるを悟らざる暗愚に對して私は驚嘆を禁じ得ないのである。

プレトオの學說は生活を統一する爲めに知覺の中に概念を發見し、特殊の中に普遍を發見しようとすることを目的としたのであつたが、是の目的を適當に達するには甚だ不完全であつたソクラテスの歸納法を其のまゝ、沒批判的に受取つたために、概念と普遍とを發見した後、其れを如何に知覺と、特殊とに關係せしむべきかが解らずして、遂にあんな現象界、本體界といふやうな二重の世界を作つて了つた。勿論、當時に於ては、現時に於けると

は社會の組織や、個人の慾望やが違つて居つたから、ブレトオがあつて了つても、其の結果は當時の人にとつては吾人が考へるよりも尙ほ一層の意味のあつたものであつたといふことは、私が色々に證明し得ることであるから、私は決してブレトオの努力の價値を認めないものではないが、併し吾人の立場より批判すれば、どうしてもさういふはなければならぬ。然るに現今の抽象理想主義者はブレトオの生活した社會とは全く其の構造も、理想も異なつて居る現代の社會に於て、猶ほブレトオのなしたことを其のまゝ無意味になさうとして居るのである。一口にいへば一元的たるを要する社會に於て、唯自己の聰明と、勇氣との足らざるが爲めに、二元的の倫理説を傳習して居るのである。私はさきに理想と、嗜慾とは人間が固有する性情によつて生活する時には、支配する標準と、支配せらるゝ對象との二つに分かれ、其等の確執と、協同とによつて、時々々の行動の様式を定めて行く必要

上、暫く分かれる二側面であるといふことを述べたのであるが、抽象理想主義者は是の一時的の分裂を永久的の對立と誤解して了つたのである。さうして、理想はなるだけ抽象的となり、非實的となつて實際の効果を失へば、失ふ程、其の權威を増すと誤解して來たのである。而して其んな理想が果して何れだけの効用をなして居るか、社會が其んな理想をもたない時に、社會は何れだけの損害をうけるものであるか、といふやうなことに到つては、彼等はまだ一度も眞面目に考へたことはないのである。

個人の生活も、社會の活動も、皆動力的である。時々刻々の行動の中に、自から生活と、活動とを統一する力も持つて居るし、また指揮する力をも持つて居る。即ち理想は時々刻々の生活及び活動の中に獨り實際に存するのであつて、決して其の外にあるものではない。もとより此處に實際といふのはわざと不定の意味で用ゐて居るのであつて、生活の性質によつても違